

多世界解釈的に考え進める「量子都市ガバナンス」 ——ガバナンスに関わりつなげる論述の再考を通じて——

谷村光浩

■もくじ

1. はじめに
2. 問い直されるガバナンス，資本主義社会のありよう，政治思想の説き明かされ方をめぐって
3. 中国にて形成されるガバナンス，デジタル社会，政治思潮の説き明かされ方を事例として
4. 多世界解釈に根ざした〈考えられる「量子都市ガバナンス」の記述〉

1. はじめに

「多世界解釈」なる量子力学の世界像をもとに、『シュレディンガーの猫がいっぱい』を説く和田純夫(1998)は、巻末に簡明な図解「ミクロとマクロの歴史：量子力学をめぐる理論と解釈の系譜」（構成：上山明博[サイエンス・ライター]）を添えている。「量子力学」と囲んだところには、〈ヴェルナー・ハイゼンベルク「行列力学」1925〉と〈エルヴィン・シュレディンガー「波動力学」1926〉を掲げ、その次に、いわゆる「量子力学の解釈問題」につらなる「コペンハーゲン解釈」には〈ニールス・ボーア「相補性原理」1927〉と〈ヴェルナー・ハイゼンベルク「不確定性原理」1927〉を、「多世界解釈」には〈ヒュー・エベレット「パラレルワールド論」1957〉などを配している(200-201)。この難題につき、物理学界の重鎮・佐藤文隆(2007)は、「物理学主流のキャリアパスを安全に歩む」には、本質的な意味を探究せずに「利用専門家」に徹することとされてきた「仕事場での心得」を打ち明ける(56; 谷村 2009, 58 参照)。

N. ボーアらのそうした「深く考えずに慣れる」を推奨する学術政策(佐藤 2005, 43)のもと、ニュートン力学(古典力学)とは異なるこの

新しい力学体系が地歩を固めてから、まもなく100年を迎える。『現代思想 2020.02 特集 量子コンピュータ』は、その巻頭の「討議」において、江間有沙[科学技術社会論]・藤井啓祐[量子情報](2020)が「量子をめぐるエコシステム」を図説している。その「量子エコシステム」内には、「基礎」にあたる量子の物理学的な研究、「量子現象を利用して計算、あるいは“制御”する研究としての量子情報科学」、「それをツール化する“応用”である工学」、そして「ビジネス利用」が主たる部分として見出され、関係づけられている(9)。さらに、その枠外にあっては、AI、ブロックチェーンなどの要語で結ばれた「他分野への応用」に一具体的には、この先懸念される「セキュリティやプライバシー、環境負荷といった、倫理、法、社会にかかわる問題」などを例示しながら一論及している(9, 11-13)。

あわせて、昨今、「量子コンピュータ」や「量子暗号」は、超大国の覇権争いの行方とも絡み、まさに注目の的となっている。中国経済論、現代中国論の第一人者・矢吹晋(2020)は、2016年、「世界初の量子[通信]衛星・墨子号が打ち上げられ、いまや[中国発の]第二次量子革命を迎えた」(169, 174)と見定め、「量子技術をめぐる米中覇権競争」(178)をつぶさに描き出してい

る。さらに、『日経ビジネス 2022.06.27 特集 量子の世紀』は、「鍵は量子技術の“社会実装”だ」として、「革命に乗り遅れるな」と「周回遅れの日本」をめぐる「反転攻勢」への取り組みを報告・指南する(佐藤嘉彦他 2022, 10-18)。

このような量子力学・技術をめぐる動向にてらせば、筆者自身の研究は、旧来の“ニュートニアン・パラダイム”にとどまる都市ガバナンスを深化させ、おもに量子力学の世界観・世界像からの類推より、上述の「量子エコシステム」枠内・外の“利用専門家”，政策分析・研究者、ルポライター等が見て取る状態はもとより、持ち出されていない—ときに“消去”された—その他の状態とも「量子的な重ね合わせ、もつれ合い」でとらえる—むしろ、現実には、あらゆる局面を汲み尽くし、論じきれないわけではないが—都市ガバナンスのありようを考え進める試みである。

これまでに、筆者は、国際連合大学(UNU)学長室等での研究プロジェクトを通じて、グローバル化の進展とともに顕在化してきた「人の“居住”状態に見受けられるパラレル性」に対応し得るガバナンス論として、量子力学の「多世界解釈」をベースにした「量子都市ガバナンス」(Quantum Urban Governance)という新たな思考を提起した(Tanimura 2005, 66-67; 2006, 276, 295)。

本論文は、この試論を段階的に構築するその後の作業にて、「量子」「都市」「ガバナンス」の鍵となる要語のうち、最後に取り置いた「ガバナンス」をめぐる思索である。“ガバナンス”なる語に関わりつながる広範な論述の量子力学的な—主として多世界解釈的な—再考を通じて、〈考えられる「量子都市ガバナンス」の記述〉をさらに練り上げてみたい。

これまで小論をまとめるたびに記し重ねてきたように、この新造語の「量子」部分に関しては、「物理学からの類推より“考えられるガバ

ナンス」の記述」(谷村 2009)にて、量子力学の“標準的”な読み解き方ではあるが「古典物理学とのつぎはぎ」(町田 1994, 147)と指摘される「コペンハーゲン解釈」に比して、量子力学的な「スーパーポジション[複数の状態が重ね合わさっているという状況」(和田 1998, 58)をそのまま受け入れる「多世界解釈」にならない、「多“居住”解釈」を提起した。次いで、「移動する人々をめぐる論考からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」(谷村 2012)では、その提案を「多“居住”/多アイデンティティ解釈」[ここで“/”とは“and/or”，すなわち“および/または”の意で遣う]へと拡げた。その後、事例研究として、まずは明清中国の「徽州商人のくらしが考究される視座，そして“考えられるガバナンス”の記述」(程・谷村 2013)にて、「“物理学からの類推”では想定しえなかった点」(108)を織り込むなどの補記をした。また、現代中国にあっては、珠江デルタの“変貌する村”の描き出され方に着目した「多世界解釈からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」(谷村 2018)にて、さらに「多居場所/多アイデンティティ/多連係/多経路解釈」を案出した。その上で、新造語の「都市」部分については、関連分野の「“都市”をめぐる論考の多世界解釈的な再読を通じて練る 考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」(谷村 2020)を取りまとめ、上述の小考にさらに補筆を施した⁽¹⁾。

試論の組み立てという工程にてらし、本論文においては、都市に関わる在来のガバナンス論を見取り図的に手際よく整理するような考えにとらわれず、しなやかに、まずは「問い直されるガバナンス，資本主義社会のありよう，政治思想の説き明かされ方をめぐって」先学の高論卓説が提起する論点を、断片的にはあるが概観する作業からはじめてみたい。具体的には、「ガバナンスの説き立てられ方から」を初手として、この要語自体の経緯、関連概念の展開を

たどり、次いで、昨今ことに「デジタル変革下の都市ガバナンスについて」討究がなされる際の視角や提言に着目する。また、「資本主義社会が説き示される視座より」として、より広く“社会システム”を見渡すにあたっては、「市民社会」や「資本主義」といった要語の語られ方を踏まえた上で、「デジタル」社会・未来との関係でなされた読み解きに着目する。さらに、「政治を主軸に説き起こされる社会のありよう」では、「統治」「階級」「オピニオン」などの要語をめぐって投げかけられた視線を振り返る。こうした示唆に富む論議については、末学ながら思い切って「量子力学的な思考をもとに再検討」を加えてみたい。

続いて、みずからが地域的に研究対象としてきた「中国にて形成されるガバナンス、デジタル社会、政治思潮の説き明かされ方を事例として」、有識の諸氏が掲げる方向性や見立てにもあたってみる。まずは、「政策の重点課題としてのガバナンスから」において、“都市建設”の動向・特徴の説き示され方にふれた後、さらに鳥瞰的に“デジタル・レーニン主義”なる視座を踏まえてなされる論究をとらえる。また、中国社会に“特有”な一側面とされる「制度の曖昧さをめぐって」、目配りがされる際の視線についてもかえりみる。そして、「現代中国の政治思潮への眼差しから」では、表明される“見解”にまつわる“技巧”や“からくり”の分析をたどる。これらの論議についても、「量子力学的な思考をもとに再検討」を進めてみたい。

最後に、各セクションでの考察を改めて簡潔に整理した上で、これまでに一試論として少しずつ書き加えてきた「多世界解釈に根ざした〈考えられる「量子都市ガバナンス」の記述〉を、先述の通り、さらに練り上げる。なお、概して“ライティング”とは、みずからが“これこそ”と思いを寄せた“肝要なところ”とする状態への「収縮」を巧みにはかり、説き示す、いわばコ

ペンハーゲン解釈流の作業であり、そうした枠組み・作法で多世界解釈にならう思惟を書きあらわすのは、行いがたいと常々感じる。さはさりながら、多世界解釈的な「量子都市ガバナンス」を一具体的な検討作業にあつては、人や都市、社会、さらにはこの新造語自体を一、「量子的な重ね合わせ、もつれ合い」のままに推しはかるようにつとめ、その考えられる記述を、量子的な個のあり方/つながり方/歩み方などのなかにあつて“分かち合い”、“話し合い”が可能なのひとつの素案としてまとめてみたい。

多世界解釈にならう本研究は、いずれの方面でも見受けられる、何かの(最適な/あるべきとする)状態だけを“言い当てる”ような、いわばコペンハーゲン解釈流の調査研究スタイルが導き出す(“もっともらしい”)解により—さらには、ときに同様なスタイルで打ち出される(“これぞ”という)対抗策や提言で—、個の思考を実質的に“操り”、ついには“止める”やりようと、おのずと“格闘”する(そうした難問とまさしく向き合う)ことにもなる。

2. 問い直されるガバナンス、資本主義社会のありよう、政治思想の説き明かされ方をめぐって

2-1. ガバナンスの説き立てられ方から

東京大学社会科学研究所の大沢真理・佐藤岩夫は、その創立70周年を迎えた2016年に『ガバナンスを問い直す』研究事業の成果を取りまとめている。ガバナンス研究としては「いわば後発的だった」と振り返る編者は、「既存の複数のガバナンスの定義を参照しつつも、それらへの距離感を保ち、自由度を確保しながら、ガバナンスという問題設定そのものをセクションやディシプリンを超えて問い直してきた」と、「独自の視角」を説き示す(大沢2016, 5)。

同書の最初に配された「I ガバナンスとはなにか」にて、「政治思想史におけるガバナンス」

から説き起こす宇野重規(2016)は、「この言葉でしか表現できないようなある種の現実、あるいはそのような現実が存在するという感覚が、私たちのなかにあるのだろう」、また「ある現実が.....言葉を得ることで急に可視化したということもありうる」(21)と推しはかった上で、歴史的にほぼ同義語であったというガバナンスとガバメントの起源から素描している(24)。ことに、「遠い過去の言葉として忘却され」(25)、「死語」となっていたガバナンスなる語が、20世紀の終盤、明確に意味づけがなされることなく「復活」・「再登場」した背景には、「本来、“統治”の作用は社会のあちこちで見られるものであったが、それを表現したガバメントがもっぱら国家統治の意味に限定されてしまったため、その代わりとなる概念が要請された」と見て取り、「ガバメントという言葉からこぼれ落ちるが、なおも一種の“統治”の作用に属する社会的諸現象のすべてが、ガバナンス概念に流入した」と明察する(30, 33)。

また、「Ⅲ ガバナンスで捉える」では、公法学を専攻する藤谷武史(2016)が、「ガバナンス(論)における正統性問題」と向き合うにあたり、まずは「ガバナンス」が「いかなる現象を主題化するために用いられているか」といった視角から、「“国家による統治”/“国家＝公共的課題解決の単位”の相対化[・間接化]現象としての“ガバナンス”」像を浮かび上がらせている(219-223)。さらに、著者は、「ガバナンス」は現実に存在する〈現象〉である以上にその捉え方＝〈言説〉の問題である」として、そうした概念的な「広がり」のなかに「グローバル・ガバナンス」を見出す(219, 224)。そして、「正統性」という概念をめぐるのは、「絶対的・客観的な規範的基準ではなく、現実世界における多元的な価値の同床異夢の共存を可能にする“休戦協定”程度に位置づけておくのが相当」(229)と述べた上で、「様々なガバナンスの内部に、正統

性への批判への応答という形で正統性を調達し続ける(正統化の)メカニズムを組み込むこと」(242)の有用性を論じている。

グローバル・ガバナンスに関しては、2012年に創設されたその学術研究団体が、5周年記念事業として『グローバル・ガバナンス学』叢書を企画・刊行している。同書にて理論的観点から「グローバル・ガバナンス論の再検討」にあたった田村哲樹(2018)は、「グローバル民主主義」—「①(国家ではなく)グローバルな次元での、②民主主義に基づく、ガバナンス」—をいかに考案し得るかについて説く(59-60)。「政治現象」を思考する際に「国家ないし“国家のような”諸制度を念頭に置くこと」を「方法論的国家主義(methodological statism)」(59)という著者は、「コスモポリタン民主主義論」や「グローバル市民社会論」でさえ、それぞれ「国家レベルの機関の“補足”ないし“補完”と.....ガバナンスの多層化[・分散化]」や「国家・政府と市民社会との協働」といった語りに、そうした認識的枠組みの「残存/残滓」を見て取り、未だその「圏内にある」という(63-69)。その上で、「熟議民主主義」の見地が役立つと前置きし、ひとまず「ポスト方法論的国家主義の立場からの制度構想」の試みとして、「代表されるべきものを個人ではなく言説として」仕立て直す「言説代表(discursive representation)」の考え方⁽²⁾を紹介している(73-76)。

なお、上述のプロジェクトに先立って、同志社大学人文科学研究所の研究叢書『公的ガバナンス[Public Governance]の動態研究』においては、その「公的ガバナンス論の理論的検討」のパートを担った風間規男(2011)が、政策研究の視点から、「複雑化するガバナンスを分析する手法として、複雑系理論を取り入れた政策ネットワーク研究の可能性」⁽³⁾を探っている(113-114)。複雑系理論の「全体論的な物の見方」「自己組織性」「非線形性」が「有効な視点を提

供する」(120)と切り出す著者は、具体的には、「政策ネットワークにおいて、コネクターの役割を果たしているアクターを特定することで、ネットワークの参入・政策学習の経路を見つけ、どのようなプロセスを通じて、ネットワークに“揺らぎ”が与えられているのかを研究することができる」(137)と例を示してみせる。「むすびにかえて」にて、そうした著者が思い描く「理想像」とは、「問題解決に必要なとされる資源が政策ネットワークに常に流れ込み、環境の変化・内部の変化に対応して新しいプログラム[参加ルールや意思決定のルール]が生み出され、官民のアクターに解釈され行動が導かれ、相互作用の集積が政策目的の実現につながっていく」(145-146)ことと表明している。

2-2. デジタル変革下の都市ガバナンスについて

アイルランド国立大学メイヌース校の教授でダブリンなどの都市ダッシュボード構築事業の一翼を担う R. キチン(Kitchin 2019)は、スマート・シティを調査し、スマート・アーバニズムらしい新ビジョンの考案を主たるねらいとする都市・地域研究書の結論において、諸氏の論述を引きながら「スマート・シティを新たな枠組みのなかに置き、描き直し、作り変えること」(219)を提起している。

「都市は場であり、単なる技術的なシステムではない」と語る著者は、サイバネティック・アプローチを評価しながらも、そうした機械的な見方では都市の複雑性を十分にとらえられず、都市問題の解決にあって、概してスマート・シティ技術はいわば「絆創膏(sticking plaster)」にとどまり、「魔法の解決策(silver bullet)」にはならないと力説する(222)。さらに、アルゴリズムを用いた手法は、客観性、中立性をまとい、都市を考察する他の手立てを押しつけ、それらに取って代わる傾向が見受けられるが、実際には機器が読み取れるデータを優

先し、より多くの情報を包含して考えるよりも除外していると留意を促す(223)。

スマート・シティ提唱者が推し進めるアルゴリズム/テクノクラートのガバナンスと自動化されたマネジメントは、いかにも合理的、論理的、不偏的で最適なパフォーマンスを引き出すようにみられるが、他方で広範にわたり人々を継続的に観測・監視し、規範的とされる作りつけの価値・判定のもとで操り動かすありようをめぐる、著者は、感情、願望、見解まで調節し、規定の振る舞い内に行動を誘引していると説き明かす(224)。また、そうしたソリューションはたいてい画一的な処方箋で最適ではなく、技術的なロック・インにともなう経路依存性などの課題も抱えていると指摘する(225)。

スマート・シティに関わる市民参加において、人々は利用者、消費者、プレーヤーなどと描き出され、考案者、意思決定者、先導者として見出されることはまれで(221)、すべての市民に有用なスマート・シティづくりにむけては、都市マネジメント/ガバナンスに、市当局、企業、市民が協働であったり、社会的、政治的、政策的な観点なども織り込んだ、オープンな作業となることがまずは重要と説き示す(225, 229)。

また、ハーバード大学にて応用数学の博士号を取得し、米国の地方自治体には新技術の導入などにあたって助言してきた B. グリーン(2022)も同様な論点の整理から考察を深める。「ユートピア的なもの」(17)と説き示される「スマート・シティのレトリック」とは、いわば「技術決定論」(23)―数世紀に通ずる「技術的手段によって社会を理解し、最適化することができるという確信」(208-209)―に根ざすものとして、「テクノロジーは必然的な道筋を辿り、特定の形にしかならず、社会や政治の進歩の主要な原動力であるという、広く共有された価値観に裏づけられている」(23)と看破する。そして、

「二者択一」とばかり、「新しいテクノロジーを頑なに拒み、時代遅れで非効率的な慣習にしがみつくと“ダム・シティ(まぬけな都市)”という藁人形」との「対置」(26)で繰り返される論議につき、次のように述べている(26)。

スマート・シティは誤った二分法の上に成り立っており、テクノロジーと社会変革のより広い可能性に目を向けられなくなっているのだ。我々は、無意味で同語反復的な問い—スマート・シティは、ダム・シティよりも優れているのか?—に捉われており、スマート・シティは民主主義、正義、公平性を上手に育む都市の未来を本当に代表しているのかという、より根源的な問題を議論できずにいる。

「代替的なビジョン」として、著者は、「スマート・イナフ・シティ(十分スマートな都市)」(27)の推進を提起する。それは、「スマート・シティの信奉者」の言説にあらがい(26-27)、「テクノロジーが都市住民のニーズに応える強力なツールとして受け入れられ、他の形態のイノベーションや社会変革と結びつけられているが、それが自己目的化したり、万能薬とみなされたりすることはない都市」(27)への展望であり、種々の予測や情報機器などの「純粋に技術的な問題を解決することは些細なことに過ぎない」として、「目標は、技術的な視点と非技術的な視点を思慮深く融合させ、民主的で平等な都市」(29)づくりとも力説する。

2-3. 資本主義社会が説き示される視座より

社会思想史が専門の植村邦彦(2010)は、「よりよい社会を求める」諸提言をめぐる、スタンスによって「同じ言葉の意味するものが.....すれ違っている」ようでは「そもそも議論がかみあうはずがない」と察し、極めて基本的な概念

である『市民社会とは何か』を主題に、「ひとつの言葉の意味の歴史的变化」を説いてみせる(11, 20)。まさに「日本語の“市民社会”という言葉の原語とみなされてきた〈civil society〉という英語」につき、とうに「死語」となった「歴史的過去に属す用法」から説き起こす著者は、その「第一の意味」として、「国家社会」[アリストテレス『政治学』の「国家共同体」という言葉の訳語]をあげる。次いで、派生語の〈civilized society〉[「国家を形成した」社会]を足場に、経済的観点を付加した「文明化した商業社会」[スミス]、さらに転じて「国家」とは仕分けた「市民社会 *bürgerliche Gesellschaft*」[ヘーゲル]、そして、その「解剖学」という探究の末に言い換えられた「資本主義社会」[マルクス]への系譜をたどり、「第二の意味」として、「資本主義的経済社会」をあげている(310-311)。

続いて、著者は、日本にて「原語(civil society)とは無関係に(誤解されて)構築されたこの言葉の意味内容」という「問題」にふれるなか、その「別物」たる日本特有の「“市民社会”概念」とは、みずからが手にすることがなかった、「マルクスをスミスに還元させ、スミスの“文明的商業社会”の反封建的内容を強調して理想化した」ものと読み解く(311, 314-315)。そして最後に、1990年代後半に「登場」した「新しい“市民社会=市民団体”論」には、「政策決定や法の制定に関して“民意”が反映される制度的な回路」、要するに「[闘技的で正統性をもった]“政治的回路”の具体的な構築」が必須と見て取る(318, 321)。

今日の「社会経済システム」をめぐるのは、世界銀行にて主任エコノミストを長年つとめたB. ミラノヴィッチ(2021)が、大まかに「リベラル能力資本主義」(米国型)と「政治的[権威主義的]資本主義」(中国型)との競合関係をとらえて、つまるところは『資本主義だけ残った』と

の結論を引き出している(2, 6, 12)。「グローバルな歴史における共産主義の位置づけ」にあたり、著者は、マルクス主義の視座にあつては資本主義自体が生み出し得る「異型」を「十分に考慮していなかった」とし、なおかつその理論においては「社会主義の歴史的役割を完全に見誤っていた」とする「深刻な欠点」(261-262)をついた上で、「共産主義とは、後進の被植民地国が封建制を廃止し、経済的政治的独立を回復し、固有の資本主義を築くことを可能にする社会システムで……別の言い方をすれば、それは発展の遅れた被植民地社会で用いられる、封建制から資本主義への移行システムだった」(傍点原著者)と力説する(90)。また、より厳格に、「社会主義とは、資本主義から共産主義の理想郷に移行する一段階ではなく、むしろ一部の第三世界諸国では、封建主義から資本主義に移行する一段階になった」とも論じている(262)。

未来にむけては、「リベラル能力資本主義」の「進化」を視野に、著者は、一方では「現実には存在したことの無い仮説上の……民衆資本主義⁽⁴⁾と平等主義的資本主義」という「目標」になり得る「タイプ」にまで論及する(255, 257)が、他方で、その「まったく異なる進展とは、金権政治、そして最終的には政治的資本主義に向かう動きになる」と推しはかる(258)。この「政治的資本主義」では、「官僚の仕事とビジネスとを隔てる境界は曖昧」で、高度な技量を備えた「個人がこの二つの役割を行ったり来たりする」こともあり、「法の支配がまだらに適用され」、言うなれば「政治資本家階級」が形成される(110-111, 136)。「社会をもっと効率的に動かせる」と気負うような「エリート層がひとつに結束し、居座りつづける」なかで、「政治的資本主義の目的は、人びとの頭のなかから政治を消し去ることにある」(259)と、著者は結んでいる。

「デジタルの未来」を視野に、『監視資本主義』

なる「新たな経済秩序」を精緻に分析する、ハーバード・ビジネススクール名誉教授のS. ブゾフ(2021)は、「資本主義が長く持続しているのは、機能が優れているからではなく、柔軟であるからだ」(傍点原著者)と見て取る(596)。この2世紀あまり「産業資本主義は……利益を出すために征服すべき“モノ”として、自然に狙いを定めた。現在、監視資本主義は、人間の本質に狙いを定めている」(傍点原著者)と説き示し(396)、いかにも「人形遣い」(17)のごとき「監視資本主義者の関心は、自動化された機械処理によってあなたの行動を知ることから、自分たちの利益になるように、機械処理によってあなたの行動を形づくることに移ってきた」、別言すれば「あなたを自動化することへと移行してきた」(389)と警鐘を鳴らす⁽⁵⁾。

その「背後」へとまわり込む著者は、現今の「データ科学者」・「応用ユートピアニスト」による“ソーシャル物理学”⁽⁶⁾なる学説が、「動物集団の行動」研究の人間への「適用」という、言うなれば「神の視点」に立つ手法を展開していることを明かす(476-478)。「確実な答えを出すマシンが旧来のガバナンスに取って代わる」(495)という見地より、「都市のパフォーマンスを向上させることができる」(497)といった言説にたじろぐ「わたしたち」をかえりみて、社会心理学を専門とするこの著者は、何よりも「前例がないその[基本的な操作メカニズムとビジネス]慣行の実態を見抜けなかった」ことや、「新たなレトリック」・「カモフラージュ」にとかく操られてきたことなど、諸因を指摘する(391-394)。つまるところ、「反民主主義的な集産主義者の野心」に駆られ、構築されてきたこの「ゲーム」を変えるには、「現状とはまったく異なる枠組みを主張する」必要があるとする著者は(395, 594)、次のような見立てを説く(597)。

民主主義が今後数十年間で再び活力を取

り戻せるかどうかは、わたしたちが激しい怒りの感情と喪失感を取り戻せるかどうかにかかっている。……危機に瀕しているのは、自らの生活に対する主権と、自らの経験の著者としての権利だ。危機に瀕しているのは、意志のための意志を育てる内的経験と、その意志に従って行動できる公的空間である。

最後に、「わたしは不可避性を否定する」と断じ、「読者のあなたも、そうであってほしい」と投げかける著者は、「人間の場所としてのデジタル未来」^{インクルーシブ}、「包括的なデジタル資本主義」への「方向転換」を求めている(597-598, 600)。

なお、Uberに関する研究で注目される、テクノロジー・エスノグラファーのA. ローゼンブラット(2019)は、「アルゴリズム的」に管理される『ウーバーランド』を緻密に描き出すなかで、この「巨大テクノロジー企業」が参入先での「好まない規制を、単に取るに足らないものとして無視」したり、持ち得る「[複数の]アイデンティティをこころろ変え」ながら、法体系の「裂け目や矛盾を見つけだそうとする」きらいがあること(173, 243)、さらには「ダブルスピーク」(故意に曖昧にした表現、ごまかし言葉)を駆使して「一見矛盾する政治的立場を同時に維持する」術計が見られること(256)を指摘している。

また、「アルゴリズムの配車係は、ユーザーをひそかに探検者へと変える力をもっている」と意表をつく著者は、「推奨」ルートをめぐり、ときに「人があまり通らない道路のデータを生成するために、自分たち[ユーザー]が最適とは言えないルートに知らぬ間に送られている」ことをあげ、「アルゴリズム的マネジメントが大多数のプラットフォーム・ユーザーに幅広い社会的利益を創出しているかもしれない一方で、

その途上で個々のユーザーをだましている可能性もある」(195)と述べている。

2-4. 政治を軸に説き起こされる社会のありよう

長年の研究成果を『フーコーの風向き』として編む重田園江(2020)は、「“いま”がどんな時代なのかを透かして見せる」(349)といった工夫をそこに凝らす。まず「知と権力」をめぐる論考では、フーコーが「権力が作動する個々の場面そのもの」に目を向け、「そこで人々はマスとしてではなく、権力作用の中で自ら服従=主体化し、[自らを縛りつける特定のアイデンティティと、それを通じて特定の生き方や生活を強いられることに]抵抗し、また権力の回路としてさまざまな役割を演じる、多様な主体として描かれた」ゆえに大いに注目を浴びたことから説き起こす(29, 39)。フーコーの「統治性研究」⁽⁷⁾にあっては、それが古典的な枠にとらわれた「政治学、なかでも政治学史(政治思想史)に対する批判の試み」(277)と評した上で、「新自由主義の統治性」につき、次のように要点をつく(304)。

新自由主義はあらかじめ「自然に」存在する自由を擁護しているように見える。だが、統治の観点から見ると、実際には全体の秩序や繁栄と両立しうる特定のタイプの自由に価値を与え、その価値を自ら受け入れゲームに参加する個人を作り出しているのである。……特定の生活や行為の様式を、個人が「自由に」選択するように導く枠組みを作り出す新自由主義のやり方もまた、別の型の統治のテクノロジーであり、別の道を通して自由を秩序に組み込んでゆく方法に他ならない。言い換えれば、新自由主義とは日常生活に介入し、特定のタイプの生を積極的に生み出し、作り出してゆく「生権力」の一タイプなのである。

そして、フーコーが提起した「自己統治」なる「自己と他者との関係とは区別される自己と自己との関係、自己が自己に対して働きかけ、自己の思考や行為をある方向に導くような関係」(305)を足がかりに、「統治によって強いられた特定の生活形態、他者との関わり方を変容させるのは、そこで用いられる統治のテクノロジーを、自己統治へと転形してゆくこと」(306)と力説している。

19世紀半ばにまで立ち返って、アナキストの「支配に抗する思想と運動」を『アナキズムの歴史』⁽⁸⁾(原題: *The Government of No One* [誰のものでもない統治])において解説するR.キンナ(2020)は、「境界を定める試み」のごとき「体系的」「分類」ないしは「代表」「総括」といった描き出し方によらず、意図的に「スナップショット」をただ提示するようなかたちで、アナキストらの「特定のアイデアについて選択的に焦点を当てている」(14-15, 18)。

「階級」を主題とするセクションでは、マルクス主義者の分析が「進歩」という観念に下支えしていることに、アナキストたちは異議を挟み(155)、さらには「労働者に“使命”があるという考え方は“根拠のない誤解を招く概念であり、本質的に宗教的で形而上学的……”との異論や、実践上の「可能性」や「期待」を語るにしても「マルクスが“社会のくず”として相手にしなかった、信用ならないルンペンプロレタリアートこそが、誰よりも革命を担う存在である」との反論を唱えたことを(156)、著者は丹念に振り返る。また、「階級による抑圧と階級以外の抑圧」の「連動」に目を配る「交^{インター}差^{セクシヨナリテイ}性」という観点にあっては、「資本主義と国家の枠組み」のなか、「すべての抑圧は絡み合い、重なり合い、互いにもたれることで支え合っている」との論考にふれた後、基本構成要素の「資本主義」自体を「中心からは外す」ことで感取される「時間の経過とともに作

り上げられてきた権力関係」に着眼した分析も、説き添えられている(162-165)。そして、「今日、アナキストの多くは、アナキーはユートピアでないからこそいいアイデア」とみていることに説き及ぶ著者は、「完全なものなんて何もない」、個々に異なる「ありのままの問題に向き合う」といった「匿名の声明」を拾い出す(208)。

近年、哲学、政治理論、精神分析の若手研究者に呼びかけて「現代社会の“つながり”が孕む諸問題」を根本的にとらえ直してきた山本圭(2018)は、「ネーション」を軸にすえない、「ポスト・ネーションの政治的紐帯のために」、ポスト・マルクス主義、^{ラディカル・デモクラシー}根源的民主主義論の政治理論家E. ラクラウの視座を糸口にした考察を進めている(82)。

まずは、ラクラウが述べる「政治的なものとは、ある枠組みを前提に営まれる通常の“政治”とは異なり、その枠組みそのものの再審によって、社会的な諸実践のなかで忘却された原初の偶発性を露わにし、新しく社会関係を創出し直す契機」(78)であることにふれ、さらに「ラクラウにとって、とりわけポピュリズムこそ、政治的なもののロジックを体现するもの」(78-79)と説く著者は、そうした「ポピュリズムの論理」が「新しい紐帯関係を創出するポリティクスでもありうるのではないか」(79)と推しはかる。「マルクス主義における必然性の論理を否定し、偶発性の論理を受け止める」(83)なかで、「私たち」という集合的アイデンティティ、すなわち「政治的紐帯」のありよう(93)をめぐるには、「本性上、一時的で儂い」「予期せぬ」「思わぬつながり」というかたちで見出される(95-96)。個々には、「一時的とはいえ、自らのアイデンティティの欠如を満たす」ものとされ(84)、「まとまりのない相互に異質な諸要素を等価性の連鎖へと節合する」という「差異の論理」と「等価性の論理」の相互貫入なるロジック(92-

93)などが説き添えられている。

ときに、その「学際的な社会的紐帯研究」に加わった大久保歩(2018)は、みずからの論考において、G. ドゥルーズ⁽⁹⁾が展開する「デモクラシー論」—「“デモクラシー的になること”とは、絶対的な内在性を目指す終わりなき営為」(150)—の要点を巧みに紡ぎ、研究主題への貢献を試みている。ドゥルーズとガタリが手がけた『哲学とは何か』(1997)より、「デモクラシーの社会」とは「超越的な主権性を欠き、平等な者たちが互いにときに結びつき、ときに対抗しながら、オピニオンを交わす社会」(130)の意と見て取った上で、この著者は、ドゥルーズがひとつには現代の「デモクラシー」を「資本主義」と「オピニオン」の視角から批判的にとらえていることに、まずは着眼する(133)。具体的には、今世の「デモクラシー」に対し、「デモクラシー的帝国主義、植民地主義的デモクラシー」(133)の側面を見透かすドゥルーズが「資本主義」との「共犯関係」のもとで社会ないし国の内外に「排除」や「格差」が生じ続けることを指摘し(134-135)、さらには「デモクラシーが基づくオピニオン」に関して「哲学は、“オピニオンに対する”闘い」(傍点原著者)と力説していることにふれ(136, 138)、著者は、特にその「オピニオン」のありようについて、次のように主たる論点を説いている(136-137)。

- ・オピニオンは、差異を取り逃がす表象の思考。抽象的で一般的なものにならざるをえない。個々の質や感情にある特異性は捨象される。
- ・オピニオンは、抽象性、政治性、空虚性をその特徴とする。最終的にはマジョリティのもの。

そして、大久保歩(2018)は、ことに「紋切り型となったような空虚なオピニオン」といった具合であるなら、「現代のポピュリズムの手法を思

い起こさせないだろうか」と問いかける(137-138)。「マイノリティをひとつの過程、生成として捉え」(傍点原著者)、「不可視の民衆の可視化というたんなる代表の論理とは異なる、潜在性を含んだ民衆の形象化」というドゥルーズの思考を足かぎりに(140, 145)、結びには、「社会的紐帯はその都度のケースに応じて形成されるほかない。来るべき民衆[デモクラシーの担い手]は、つねにいたるところで発見され得る」(139, 151)と記す。

2015年、ドゥルーズ没後20年の討論会に端を発し、曲折を経て編み直されたという論集『ドゥルーズと革命の思想』(鹿野祐嗣編 2022)では、堀千晶(2022)が、「ドゥルーズとマルクスとの関係はいかなるものか」(325)を主題に、「既知のことばかり」と断りながら、「いくつかの側面」を「再確認」・「整理」する(327)作業を入念に進めている。ことに、「政治運動および政治主体のあらたな形態」をめぐっては、「マルクス主義の内部」にあって、「労働者階級は、今日もマルクスの時代と同じように定義されるのだろうか」(傍点原著者)という「問い」の口火を切った「若きルカーチ」に、ドゥルーズ自身が1986年の講義にて賛辞を寄せたことがたどられている(339)。また、メルロ＝ポンティの著述⁽¹⁰⁾にふれるなかで、その「弁証法的思考」には与しないが(348-349)、「特定のプロレタリアート像の特権化と前衛党の中央集権……への批判を評価する」(348)ドゥルーズが説き示される。結びとなる「“プロレタリアート”の再定義」のセクションでは、1971年の講義にて、19世紀のフランスを念頭に、何よりも「プロレタリアートが当時は階級と見なされていなかったし、そう見なされる可能性すらなかった」(395)ことへの着眼を肝要としたドゥルーズが、「闘争」にあっては、「統一的な基準」でもって括ることができない「階級ならざるもの」(399)・「階級外」の人びと」(403)を提起していること

をおさえている。

一方で、フランス哲学・思想史等の領域を専門とする松本潤一郎(2016)は、「哲学または“現代思想”における〈政治〉の存立—政治哲学ではなく—」(538)を思索するにあたり⁽¹¹⁾、ドゥルーズらを批判したA. バディウの視座を「示唆的」(528)として、次のような観点に着目している(530-531)。

- ・〈多〉はその内側から割らなければいずれ〈一〉となり、当初おのれが目指していたはずの多様性ならぬその敵に反転する。
- ・〈多〉の〈一〉への反転から脱け出すには、「敵対関係」という〈二〉を導入して〈一〉を割ることが必要である。

そして、「〈一〉に対してドゥルーズは〈多〉を掲げ、バディウは〈二〉を重視する」が、「〈一〉が抑圧的であるという点で両者は一致する」(532)ことにふれる。しかも、「数学的形象への依拠という点で、両者は同じ地平に留まっている」との考察を加えた上で、著者は、「複数の世界に私たちを分岐させる体制を、私たちがどうすれば脱けだすことができるのか。そしてどこに脱けだすのか」(538)との自問と向き合っている。

2-5. 量子力学的な思考をもとに再検討

■社会・経済をいかに説き起こし得るのかを
探りあてる作業にて

人が他者とともに営む社会・経済をいかに読み解き、描き出すかという作業にあつては、“観察者”が各々の視座からその特質を最もよく表しているとする諸状態を、巧みに抽出している。それは、概して「収縮」を仮定するコペンハーゲン解釈的な眼差しでなされているかのようである。

具体的には、現今の術語から《こぼれ落ちる》

状態を的確に表現しようとかつては《ほぼ同義》であった《死語》を新たな装いで《復活・再登場》させる仕方を含めて、《ある種の現実》・《問題》なる状態の《可視化》ないし《主題化》がはかれるとの素描や、《誤解》に加え、あるべきとする《別物》の提起に、そうした“からくり”が見て取れる。また、《問題設定そのもの》や《認識的枠組み》自体を《再審》・《問い直し》、ことに旧来の発想をこえて《独自の視角》から《新たな/異なる枠組み》にて諸状態を見極めようとする“観察者”は、《必然》とされがちな体制・制度やアクターの論理を《否定》ないしは《中心からは外す》なり《相対化・間接化》をはかり、《感情》や《一時的で儂い》《予期せぬ》《偶発性》などへの着眼により、代わりになり得る状態の案出を試みている。

コペンハーゲン解釈的な言説ではあるが、問題であるとみる状態を《絡み合い、重なり合い、互いにもたれることで支え合っている》ととらえ、《交差性》という図式を思い浮かべながら《スナップショット》し続けるアナキスト“観察者”には、何かひとつの状態を見て確かめるとき、他のあらかじめ問題としていた局面・対立関係を捨てずにあわせ持ち続ける視線がうかがえる。また、《オピニオン》を《差異を取り逃がす表象の思考》とする見方においても、何かに括られる際に作動する《捨象》というメカニズムへの強い危機意識が示されている。

■担い手や関係者として見出される人

“より良い社会・経済”を形づくるにあたり、人々はたとえ名ばかりの《参加》であっても《協働》でも、あるいは《闘争》にしても、何らかの役割の担い手・関係者として見出されていく。いずれにしても、そうした個のありようは、コペンハーゲン解釈的な「収縮」描写を思い起こさせる。

ことに、マルクス主義において語られる《労働者》には、その固定的なアイデンティティに、

持ち合うべきとされる特定の視線、つながり、果たすべき《使命》が絡み合った一例を見て取れる。また、目にとめながらも、当てにならないものは《社会のくず》へと仕分けるそのやりように、アナキストらは《ルンペンプロレタリアートこそが、誰よりも革命を担う存在》と論じ返すが、個のあり方にその務めを絡ませた一状態に「収縮」させる点では通底している。もっとも、《特定のプロレタリアート像の特権化と前衛党の中央集権》に対する《批判》では、《潜在性を含んだ》個のありようを《過程・生成として》把握する手立ても創案されてきた。《階級》として見出される前のひとつに括りようのない状態を、それにあたらぬ・それ以外である《階級ならざるもの・“階級外”の人びと》と表すとともに、つぶさに観察がなされると《来るべき民衆[デモクラシーの担い手]は、つねにいたるところで発見され得る》という。ただ、この思索においてさえも、結局は関心が寄せられるべきありようへの「収縮」がはかられ、同時に重ね合わせ、もつれ合いになっている他の状態を人為的に捨てられるかのような論理が《残存》する。

なお、特定の際立った状態をいくつか重ね合わせ、それぞれの《役割を行ったり来たりする》個のありようや、《法の支配がまだらに適用され》、《人びとの頭のなかから政治を消し去る》など、都合よく一状態の必要な分だけの「選出」と他の状態の「棄却」がなされるさまの言い回しも、コペンハーゲン解釈的な「収縮」描写と相通ずる。そして、その「収縮」なる原理では説明を施せない《隔てる境界》は《曖昧》と、言うなれば表す術のなさがまさに表されている。

また、「収縮」を仮定するコペンハーゲン解釈のもとでは、みずからの「擬装」《カモフラージュ》に都合がよいとする複数の状態をことさら《同時に維持》し、特定の《好まない》状態を《取るに足らないものとして無視》する《レ

トリック》などが駆使され得ることに鑑み、多世界解釈的に思考する際の「無数の状態」には、そうした策略が繰り出す「一状態」も含まれることに気づかされる。

■「共存している状態の全体」のありようを、絶えずさらに考え進める

《代表されるべきもの》を見直し、大いに工夫を凝らした、いわばありきたりの型にはまらない《言説代表》も、量子力学的な視座に立つなら、つまるところ「収縮」を仮定するコペンハーゲン解釈的な方便によるものと見て取れるが、そうした《代表》なるものをめぐって観察を繰り返した際、「どの状態が選ばれるか」がしなやかに推しはかられる作業にて、“いつも”の《個人》や《民衆》にとどまらないことが例示されたといえよう。提言の妥当性、実現可能性など、政策的な評価といった観点から討議が重ねられるであろうが、量子力学的な思考にあっては、「共存している状態の全体」について見当をつける上で、このような「型にはまらない」状態への視線はことに示唆に富む。

また、「正統性問題」についての論考にて説き示されていた《多元的な価値の同床異夢の共存を可能にする“休戦協定”程度》との《位置づけ》と、《批判への応答という形で正統性を調達し続ける(正統化の)メカニズムを組み込む》との提案は、量子力学的にとらえるなら、コペンハーゲン解釈的に“これこそ拾い上げよ”と提起される“異論”なる“際立った状態”を汲み上げ続け、調整をおこたらない仕組みが有用との見方と読み解ける。なお、その都度の括りが《“休戦協定”程度》にしても、基本的には《オビニオン》という《差異を取り逃がす表象の思考》と通ずるところを察知されよう。

■私たちや社会・経済が歩むとされる経路

到達目標としての《理想郷^{ユートピア}》を含め、何らかの視座からあらかじめ見出した特徴的な経済・社会の状態を時間の経過にそってならべ立て、

数段のステージに分けて“変動”をとらえる発展段階説では、ときに《異型》とする状態に着眼した斬新な説き明かしも添えられる。もっとも、いわゆる通説も新説も、いずれもこれこそ目の付け所と“観察者”が「収縮」させた単線的な経路・段階をベースにした論述であり、つまるところコペンハーゲン解釈的な絵解きと見て取れる。

多世界解的な見地においては、すでに掲げられた経路・段階を参照しつつも、特定の制度・体制や技術、それらに《作りつけの価値》に鑑みた状態の描出—もっともらしげな《決定論》や《最適化》、ひいてはいわゆる《神の視点》が明示する《必然的な道筋・形》、その《自動化》などの見立て—において仮定される「収縮」を一切考えない。量子的な重ね合わせ、もつれ合いにある私たちや社会・経済が、なお他に考えられる無数のルート—いつしか忘れ去られてしまっていた理路、《見誤っていた》と打ち消された段階の役割・路線、《前例がない》ことから《見抜けなかった》/《知らぬ間に送られている》経路、さらには気づきにくく未だ見出されていない道筋さえ—をすべて同時に進んでいく「量子ウォーク」という考え方で持って記述され得るようなありようを推考する作業となろう。

なお、極めて含蓄深い《別の道》なる—ときに《最適とは言えないルート》[比喩的にも]かもしれない—提案に導かれる場合にあっても、そうした状態だけに「収縮」させず、いくつもの取り得る《回路》を同時に歩むさまのままでとらえ直す。《不可避性を否定する》視角はもとより、少なくとも、まずは思索にあたり《ユートピアでないからこそいいアイデア》や《完全なものなんて何もない》との見方は、他の状態を“汲み出し”続ける際の大きな足がかりになる。

■ 「一」、「二」、「多」などの「数学的形象」をもとに描き出される目指す状態

社会・政治的なありようの観察にあつて、“観察者”の視座より、それを不都合な《一》なる状態と見定めた際の《「敵対関係」という〈二〉を導入して〈一〉を割る》や《〈一〉に対して〈多〉を》といった説き方については、いずれも特定の目指すべき各状態への「収縮」を念頭におく—その状態以外はさながら消し去れるとみる—かのように、コペンハーゲン解釈的な考えを思い起こさせる。端的に《複数の世界に私たちを分岐させる体制》と示されるとき《分岐》なる要語にも、その量子力学的な思考法が見受けられる。

しかも、そうした《体制》から《脱けだす》ことの可能性や場所を探るとの問いにさえ、根底には「収縮」という原理を見て取れよう。“観察者”が人為的に捨て去り、なきものと始末する状態は、共存の程度はさておき、共存している状態の全体から消滅するわけではない。《数学的形象》でいえば、他にゼロや虚数を用いた状態の表し方も、「収縮」を踏まえた説示であれば、コペンハーゲン解釈的な論述といえよう。

なお、複雑系などの《全体論》も、そのような接近の仕方では考察し得る「同時に共存している無数の状態」という“全体”から、個々に「収縮」させた状態が研究対象とされている。《全体論》なるアプローチは、政策的意図などを踏まえ、それらしくある状態を《全体》として論じるが、“全体”を汲み尽くすものではない。

3. 中国にて形成されるガバナンス、デジタル社会、政治思潮の説き明かされ方を事例として

3-1. 政策の重点課題としてのガバナンスから

国家社会科学基金の重大研究プロジェクトに採択され、中国科学院農村発展研究所長 魏後凱が主導した調査の「最終成果」にもとづく『中

国の特色ある新しい都市化への道』⁽¹²⁾(魏後凱編 2021)には、はじめに、「都市化の本質は人の都市化であり、農民を市民に変える過程である」(魏 2021, i)と明示されている。具体的には、「ライフスタイルや消費の仕方など」に「農民の習慣と特徴が残り」、「都市の生活に馴染んでいない」、戸籍上「都市のシステムから除外され」てきた、「農村からの出稼ぎ労働者である“農民工”の市民化」や行政的に都市に取り込まれた「地元農民の市民化」⁽¹³⁾を「困難」な課題とする(魏他 2021, 17)。「戦略的重点項目」のひとつに掲げられた「都市の発展の質的向上」にあつては、「現代的な都市管理を高度に重視し、建設と管理を有機的に結合して、建設偏重から建設と管理の両立、管理重視への転換を実現させる」(55, 57)との方向性を説き示す。そして、「中国の特色ある新しい都市化を推進するための持続可能な制度体系の策定」(73)にあたり、「効果的なメカニズム」とする「大衆参加システム」を、次のように概説する(76)。

市場の主導と政府の誘導の下で、大衆が都市化の過程において主体的な立場を強化し、大衆の参加の度合いを高め、社会各界の人々の参加を呼びかけ、奨励する必要がある。そこで、互いに連動するシステムを作り、都市計画と建設において、大衆の意見に耳を傾け、アドバイスを取り入れ、広報システムを完備し、大衆(特に弱者)に随時、それにかかわる政策を理解してもらい、監督とフィードバックのシステムを通して、大衆に都市化の建設に参加させ、質の向上に注目させるのである。

『中国のCASE革命』⁽¹⁴⁾を「活写」する産業エコノミストの湯進(2021)は、一連の国家戦略をもとに、2035年以降の「モビリティ社会の担い手としてのスマートシティ[智慧都市]」

(195)を説き明かす。その「イメージ」とは、端的に、「都市の経済活動・市民生活を軸とするデータ・物流・交通を都市建設のベースとし、その上にインフラ、施設・住居を計画する考え方であり、ゼロからつくっていくというニューシティ」(243)と語る。

なお、現代中国政治、政治社会論を専門とする江口伸吾(2021)は、おもに「都市、農村の基層社会」に着眼し、近年の「社会管理から社会ガバナンスへ移行する過程」⁽¹⁵⁾をたどっている(18-19)。「公民社会(市民社会)」の形成にあたり展開される「中国型の民主」を、著者は、「選挙民主」と「協商民主」⁽¹⁶⁾の機能的「分割」、「使い分け」(272, 274)と見て取り、次のように力説する(274)。

「協商主義」の起源の一つとして、欧米諸国で普及した「討議デモクラシー(deliberative democracy)」があげられるが、中国では、議会制民主主義の形骸化を克服する目的で導入された欧米諸国の文脈とは異なり、限定的な「選挙民主」で保障される一党支配の統治体制の維持を前提として、民主主義の普遍的な価値の深化よりはむしろ党・国家体制の統治への信任を維持、向上させる手段として「協商民主」が逆説的に運用され、権威主義体制において市民の不満を減少させる機能を備えた対話の装置として移植された。

加えて、著者は、「党と大衆とを直接結ぶ紐帯」をなす「大衆路線」を、「政治的な民主化を回避しながら権力(党・国家)と社会をつなぐ回路」(274)として描き出す。近年の「ビッグデータとインターネット技術を結合させた社会ガバナンスの革新」をめぐるのは、「人々の生活の利便性を高めただけでなく、むしろ党・国家による監視社会の現実化、ひいてはデジタル・

レーニン主義による権威主義体制のアップグレードへとつながる問題性」(270)に論及している。

3-2. 「デジタル・レーニン主義」なる視座を踏まえて

長年にわたり中国を継続的に観察してきた矢吹晋(2018)は、『中国の夢』のなかにて、「現実化するデジタル・レーニン主義」(ch. 3)を説き明かす。2017年、ドイツのS.ハイルマンが「習近平のデジタル中国化構想」を「デジタル・レーニン主義」なる「新語」で巧みにとらえ(49)、その見立てを伝えたウォール・ストリート・ジャーナル紙のコラムニスト、A.ブラウンは「いわゆる“習近平独裁”の本質とは、“ビッグデータ独裁”にほかならないと核心を衝いた」(50)と評した上で、みずからは1950年代末には「コンピュータなくして社会主義なし」と見極め、昨今のありようは「かねて夢想していた“電腦社会主義”」(208)と見て取る。そして、1980年代後半に東欧諸国の動向を視野に唱えてきた「資本主義への回帰論」(209)を旧説と退け、「“限りなく資本主義に近い中国の電腦社会主義”と“限りなく社会主義に近づく資本主義システム”とは、これからどのような関係を取り結ぶであろうか」と立て直した問いにつき、「体制間の融合」(209)への過程を推しはかる。

また、続編ともいう『〈中国の時代〉の越え方』に収められた「デジタル・レーニン主義ノート」にて、「AIとビッグデータが計画経済を実現する？」から説き起こす矢吹晋(2020)は、「毛沢東時代の失敗例」を念頭に、「官僚の誇大報告作風をAIがチェックすることによって、恣意的な報告は否定され、“实事求是”の正しい統計が形成され、それが計画経済の運営の基礎となる」(79)と期待を寄せる。「官僚資本主義から毛沢東の“夢”へ」(86)との展望に立つ著者は、近時の「中国の現実」を「国家資本主義が官僚資

本主義として自立している姿」と見定め、「“官僚階級”について、現実に即した階級分析を必要とする事態が生まれつつある」とし、「毛沢東の掲げた“継続革命”は、課題として残されている」(89)と敷衍する。「[社会主義]初級段階の終焉を迎えた中国はどこへ向かうのか」を見極めるにあたり、著者は、「天眼」のごとき「管理のデータやツール」を、存置された「必要悪」なる「“官僚階級”が管理するのか」、あるいは「民主的に、人民大衆のために奪い返すことが可能なのか」が、「決定的な問題」(91)と力説する。

ネットワーク技術やサイバーセキュリティの領域を専門とする持永大(2022)は、スマート・シティなどの事業を含む、中国「一带一路」の情報通信分野での構想—『デジタルシルクロード』—に着目し、「国際政治におけるパワーの概念」⁽⁴⁷⁾をベースに、その戦略上の「目的」や「影響力」を分析している(9)。「ビッグデータを活用し、情報通信技術に支えられた権威主義体制」がS.ハイルマンによって「デジタルレーニズム(Digital Leninism)」とされ、「西側民主主義との対立」などの「シナリオ」が提示されていることふれた上で(19)、この著者は、「海外にその方法を広げることで、国際的な技術の社会実装の方法を規定しようとするものである」(20)と、中国の企図するところを察する。また、「受益国」における「デジタルインフラのロックイン」(20)なる固定化の問題を指摘する。そして、中国が掲げる「運命共同体」(67)づくりという要語を踏まえ、「デジタルシルクロードの目的は、中国に対する依存度を高め経済的な利益を確保し、価値観を共有する共同体を通じて国際的な影響力を行使しやすくすること」(66)と整理している。

スマート・シティに関しては、「公共インフラのデータを集約するクラウド・プラットフォームの構築」を推し進め、「都市の現状をリアルタイムに把握することで運営を効率化す

る」取り組み(92)などを概観した後、海外への展開を視野に、「スマートシティによる安全の提供」を通じた「構造的パワー」の向上(192)という筋立てを解説している。なお、「権威主義国家は、情報通信技術を活用する一方、国民を中央集権的なシステムのユーザーとして囲い込み、情報へのアクセスの権利や自由を制限する」と見透かし、「法による支配」(187)という側面をえぐり出す。

最後に、「技術の社会実装に関する価値の対立」(244)にあって、著者は、「受益国が、自由や開放性といった価値の重要性を見いだせるよう呼びかけ……、中国共産党による価値を採用せずとも、政治的な安定、経済的な発展、および安全保障の確保が可能であることを示す必要がある」(245)と提言している。

3-3. 制度の曖昧さをめぐって

「中国経済学」へと誘う加藤弘之(2016)は、「従来の中国経済論の枠を突破し、経済システムに焦点を当てて、中国の独自性を明らかにする研究入門書」(2)とした著述において、かねてより関心を抱いてきた「曖昧な制度」なる要語を仕立て、それを「本質的な特徴」とする「中国型資本主義」(4)を説く⁽¹⁸⁾。「一見すると相矛盾し、反発し合うように思われる諸要素が、“曖昧な制度”を媒介として、有機的に結びつき、全体としてうまく機能している」ことに着眼する著者は、いわゆる「国家資本主義」や「大衆資本主義」といった見立てでは、いずれも「一面的」と断じ、「中国経済の本当の姿を見誤ることになる」と力説する(5)。

明・清代の「包」[請負]から説き起こす著者は、「中国では、制度移行に伴う一時的な制度の並存や重複を利用するだけでなく、“曖昧さ”を意識的に温存し、積極的に活用することで、組織や規則に縛られることなく個人が自由に意思決定できる範囲を広げ、機動的、効率的

な制度運用をはかる」(28)仕組みが作用してきたと見て取り、その「曖昧な制度」については、「高い不確実性に対処するため、リスクの分散化をはかりつつ、個人の活動の自由度を最大限に高め、その利得を最大化するように設計された中国独自のルール、予想、規範、組織」(30)と概念規定する。また、それは要するに、「曖昧さが高い経済効果をもたらすように設計された中国独自の制度」(12, 30)とも手短かに述べている⁽¹⁹⁾。

「中国型資本主義」の行方に関して、著者は、その「“過渡的な側面”と“中国独自の側面”」や制度の「経路依存性」(207)を勘案し、つまるところ「先進資本主義国の経済システムへの収斂がいかに望ましいとしても、……当面は、“曖昧な制度”を維持しその内容を望ましい方向へと改善していくことで、前に進む以外に道はない」(208)という。

ときに、「“秘密結社”を知らないで、どうやって現代中国がわかるのか」と問いかけるルポライターの安田峰俊(2021)は、「中国人の社会の裏側」とする世界にて策動する「秘密結社」、すなわち「公的ではない政治団体や結社組織(幫)、民間宗教」(15)への取材を重ね、ことに香港と深い関係にあるカナダの華人につき、清末「会党」の流れを汲む、「表社会(儀礼的・秘密結社)と黒社会(犯罪的・秘密結社)の双方にまたがった存在」と見受けられる組織—ホンメン洪門—(18-19)の実情を明かしている。また、「政治化」した「会党」では、中国にて「衛星政党」にまでいたった組織—中国致公党—を取り上げ、「共産党との二重党籍者」(22, 89)の伏在にふれている。「耳慣れない名前の組織ゆえに、中国共産党の名前を出すことなく中国政府に有利な活動をおこなえる強み」(89)を活かし、「対内的」には「“中国共産党的”な世界観や思考フレームを定着させ」(90)、「対外的」には「在外華人」を含む「親中国的な勢力」にむけて「中国共産

党的な認識を刷り込んだり、彼らに中国の国益に見合う言動をとるように仕向けたり」するなどの「政治工作」(90)をつまびらかにしている。

「おわりに」で、著者は、中国共産党は「現代中国の秘密結社として最大最強、かつ最も成功した存在」であり、「中国の壊し方」, 「天下を取るための基本公式」⁽²⁰⁾を「体験的に理解している」(315)と論じている。

中国における「都市への変貌」を、華北平原に現れたその起源から説き起こす都市・地域開発論の巨匠、J. フリードマン(2008)は、「現行のガバナンスの仕組みについては、過去のそれとまさに同じ生地から裁たれている」(27)と語る。「悠久の歴史を通じて、最高の権力を有する者自身の臣民が存在しただけで、明確な権利や義務がある市民は見られなかった」(194-195)とはいえ、後期中華帝国の「見て見ぬふりをするような政治体制」のなか、同郷・同業団体などが構成する「地方のエリート集団」が「ガバナンスに関わる必要な手はずを整えた」ありようなどの「歴史的足跡」(43-44)をたどり、「インフォーマルな都市ガバナンス」の手法・仕組みは「中国社会に深く埋め込まれ」、時代をこえてなくならず「残存」(195-196)していると説き明かす。

その「誰も説明責任を問われない.....手立て」(201)にあって、現今「政府の仕事が営利行為と違わぬとき」、著者は、「市政の二面性[威厳のある官僚機構の側面とあこぎな資本主義の側面]」は「調和を明らかに欠いた.....桁外れな混乱状態」(217, 219)をもたらしってきたと指摘する⁽²¹⁾。なお、そうした「二重性」に関しては、ときに「あたかも中国がある種の避けられない“過渡期”にあるというが、.....何にむけてなのか、うわべだけ民主主義的な仕組みのグローバル化した市場経済なのか」(219)と問いかけ、ややもすれば「単に一過性の現象」とされたものは、「その国の政治的なランドスケープの変わ

らぬ特性ということになるかもしれない」(219-220)と推しはかる。

「これから先の進路」をめぐり、ことに中国にあって「持続可能な都市とは」通論の「経済、環境、社会」といった側面に加え、「無秩序な状況と停滞との“中道を歩むこと”」(30, 255)と見極める著者は、「中国の人々の気風は、歴史的に、然るべきバランスを探し求め、見出すのに長けている」との見解を「現世代」に示し、再考を促している(255)。

3-4. 現代中国の政治思潮への眼差しから

米国コロンビア大学での講義録をベースに、「スペクトル分析」なる手法で「憲政自由主義者の視角」から現代中国(大陸)の主要な政治思潮を描出した張博樹(2019)は、そうした作業に際して、まずは「必ず取り上げておくべき現象がある」(31)として、次のように注意を喚起する(31-32)。

公開された「思想」は往々にして「フィルター」を通したり、(当局にとって不適切な部分を)「捨象」したものとなっており、それらが作者の真意を包み隠さず表出したものとは限らない。例えば、主題の確定、発表のタイミング、表現方法などについてはおそらく用心深い検討を重ね、最終的に出て来たものは多くの場合高度に偽装した内容になっている。.....そこには慎重な技巧が施されていて、同業者でなければその真意を見抜くことはできない。.....文章が語る表層「思想」に止まらず、言外に隠された内容を把握する必要があるのだ。

ことに「穏健リベラル派」にあっては、「党=国家制度の根本的原則を直接批判することができないがゆえに、遠回りな方法で様々に筆を曲げつつ、自分の観点や政治的見解を表現

している」(370)と看取する著者は、歴史的な事象との「類比」,「ほのめかし」(371)などの具体例をあげ、「その抵抗の形式は婉曲的であり、技巧を重んじており、高度に芸術化されている」(370)という。

また、この「抵抗する芸術」と同時に共存しているのは、「媚を売る芸術」である」(373)として、著者は、「権威主義[鄧小平が執政した時期とポスト鄧小平]時代、新全体主義[習近平]時代の道化者の役」(30, 373)を説くなかで、その「耐え難い光景」を次のように「観察」している(374)。

彼らは体制内で……ただ党＝国家の命令を聞いて、いくつかの命じられた作文だけを書いて、党への賛歌を歌うような役立たない学者とは異なって、多くの場合、「独立した」顔で現れ、民間のあるいは「学術」の言葉で現実を飾りつくろい、歴史を歪曲し、少しだけ批判はするが大局では大いに手を貸し、党＝国家の大歴史観を肯定するという前提の下で目下の「問題」を指摘している。

特にそうした「重要人物ら」が「権力」に「取り入る」折には、「ただ“媚を売る”のではなく、ある種の投機をしている」(374)とも明かす。

昨今、「ソフトパワー」が「国策」とされるなかで着目されている「儒学治国論」(281)をめぐるのは、「党専制」に代わり「儒家専制」という「未来の中国における新しい専制形式」(289)をおのずと導くが、いつしか「中国文化と中華文明の継承者にもなった」(301)中国共産党は「政治儒学」の主張を「過度に空虚で、現実となる可能性が絶対になく、脅かされることはない」と見透かし、「それほど害とはならない知識人」の「独り言」を許容することで、むしろ「“調和”と“学術的な繁栄”を装飾する」

(303)からくりを作動させているという。

また、「新民主主義への回帰」を掲げる「レーニンびいき」の「紅二代」が展開する論理を説き示すなかで、著者は、とりわけ「レーニンの遺産のなかの全体主義を全く無視している」(328)と、その「認識の盲点」(329)を指摘する。

この張博樹著『新全体主義の思想史』(石井知章他訳2019)にコメントを寄せる矢吹晋(2020)は、「思想流派の動態的仕分け論、見取り図としてこれに勝る分析はあるまい」(204)と述べた上で、「習近平による治国は一面では……“超全体主義”の色彩をもつが、これは21世紀科学技術による管理社会としての“先進モデル”でもあり、……先進国も類似の管理社会化への道歩んでいる。生い立ちは異なるが帰結は類似する二種の管理社会をどのように止揚すべきかが問われている」(205)と力説する。

中国経済発展論の碩学、中兼和津次(2021)は、「毛沢東という人物」を「現代中国の政治や社会を理解する大きなカギ」(2)と見定め、「門外漢、素人だからこそ……これまでにはない新しい視点から捉えられるのではないか」との着想から、また「よく“岡目八目”というのではないか」(3)と付言して『毛沢東論』を展開する。

毛沢東の「発見」に「革命勢力としての農民」と「実用主義[悪くいえばご都合主義]の原理とエリート[選良]主義の原理は相互補完的に働く」との仕組み⁽²²⁾(351, 365, 367)をあげる著者は、「毛沢東時代の中国における社会的統治(ガバナンス)」につき、「なぜ暴力という恐怖の手段を毛沢東が使ったのだろうか」(108)と問い直す。そして、「秦の始皇帝に代表される伝統的な力による統治思想」(108)ばかりでなく、「マルクスが宗教を一種のイデオロギーとして見たのに着目し、両者の関係を逆転させ、イデオロギーを宗教と位置づけた」(353)H. アーレントの論じ方などを踏まえて、次のように深慮をめぐらせる(378)。

私にはマルクス主義の、とくに唯物史観に内在する階級(闘争)観とその絶対性、それを「科学」と称する彼らマルクス教徒たちの傲慢さ、またそれが醸し出す一種の宗教性、そこにこそ暴力と残虐性のもう一つの種が仕込まれていたような気がしてならない。

「中国では昔も今も、真理は天から降ってくることに変わりはない」(378)と括る著者は、「誤ったマルクス主義理解」を生んだ要因のひとつに、「明治期以降日本から中国に伝わっていった……とくにマルクス主義や社会主義関係の用語」に見受けられる「重大な誤訳」(68)も指摘している⁽²³⁾。

さしずめ「社会主義思想とは、皮肉を込めていえば“近代から近代に至る長い過渡期に生まれる思想的潮流”と説き明かし、「人類はいまや再び真の自由と平等とは何かを探し求める旅に出た」という著者は、「少なくとも、レーニンや毛沢東からそうした思想は求められないことだけは確かである」(375)と断じる。

東京大学グローバルCOEプログラム「共生のための国際哲学教育研究センター」に関わり、「儒教復興」などに関わる課題を担ってきた中島隆博(2011)は、『共生のプラクシス』を探究するなかで的一幕間として、「ジル・ドゥルーズと中国」(160)に論及している。

「ここでは焦点を“生成変化”に当ててみたい」という著者は、はじめに、その要語とは「自己が自分自身でありながらも他なるものに化すというだけでなく、他なるものもまた別のものに化し、しかも、この世界までもが深く変容するという未曾有の事態を示している」(161)と説く。そして、「道教思想あるいは道家思想の中に、……ドゥルーズ的な“生成変化”に向かう可能性がなかったわけではない。その方向性は『莊子』に示されていた」(175)として、

寓話「胡蝶の夢」⁽²⁴⁾を引き、その「物化」を次のように解説する(176)。

「物化」という言葉は、人間が人間以外の他のものに変化したり、別の姿に化したり、別人になったりする事態を示している。それは、儒教的な「教化」という概念には還元されるものではない。なぜなら、「教化」は、小人が君子や聖人になるという啓蒙のプログラムを支える変化であり、あくまでも方向づけられた変化にすぎないが、「物化」はそのような政治的・倫理的・経済的な体制と利益に向かって整序されない「生成変化」であるからだ。

加えて、「重要なことは、“物化”の前後において、……決して〈他者の立場に立つことはできない〉と考えていることである」(177)と要点を説き示す。

この幕間の最後に、著者は、『莊子』の「物化」とは「能動性に転化することのない極度の受動性で……すべてを肯定し、運命を恬淡と受け入れる」(179)のに対して、ドゥルーズの「生成変化」とは、「実に方法的であり、倫理的である」(180)と、見地の相違点を明らかにしている。

3-5. 量子力学的な思考をもとに再検討

■喫緊の課題解決にむけて、しかるべき(裏腹に不適當な)担い手として見出される人や都市

毛沢東の《発見》は、ひとつには《革命勢力としての農民》とされる。時を経て、昨今は未来図にそぐわないとして、《農民工》や《地元農民》との仕分けで“対象化”される人々は、《都市の生活》に慣れ親しみ、《都市のシステム》に組み込まれた《市民》であるように奮起させられている。社会・経済の調査分析や方向づけが試みられる際、おもな“歯車”として着目され

た者は、いわばコペンハーゲン解釈的に“もっともらしい”/“会得すべき”個のあり方へと、“観察者”の意にそってその都度「収縮」させられ、その折々に目標達成にむけて“役に立たない”/“差し障り”などとされるアイデンティティを捨てるように仕向けられてきた。この《市民》なる語自体についても、先刻、さしあたり《システムのユーザー》を言い換えたような状態への「収縮」がはかられている。

また、代案として提起された青写真が《過度に空虚で、現実となる可能性が絶対になく》、主唱する者が《それほど害とはならない》と判定されたなら、そうした《独り言》は大目に見られ、体制側は《大衆》/《市民》に観察させたい一状態を《装飾》する役をその者にむしろ果たさせるとの“アクター操作”がみられた。このような展開にあっては、コペンハーゲン解釈の確率論に根ざした《他の状態も「存在しないわけではないが、……まれにしか出現しないと考えると無視することに】》(都築 2002, 212; 谷村 2018, 6, 17 n. 9 参照)との見解や、観察されている者が気づきにくい“務め”を重ねた“エージェント”なる個のありようへと仕立て上げる、“内密^{ステルス}「収縮」”とでもいうべき技法に思いが及ぶ。

コペンハーゲン解釈をベースとするそうした見方や手法は、《モビリティ》/《スマート》/《デジタル》という修飾語付きで提示される都市ないし社会のアイデンティティやはたらきについても、同様に適用され得る。特定の一状態への「収縮」がいかなるからくり、操作のもとになされたのかを探り続けることは、あり得る無数の重ね合わせ、もつれ合い状態を思考する際の取りかかりとなろう。

■「共存している状態の全体」のありようを、

さらに考え進めるために

現代中国の社会・経済をより一層的確にとらえようと、先学諸氏は独自の視角で観察し、これこそ肝要なところと、言ってみれば、コペン

ハーゲン解釈的に「収縮」させたいいくつかの状態をベースに力強い分析を展開する。旧来のアプローチでは汲み取れていないとして、みずからの専門分野が仮構してきた《枠を突破》するという、いわばこれまで慣れ親しんできた“舞台”自体の大幅な拡張を試みるなり、当事者としては関与していない演目の“舞台”を《門外漢、素人》のような《視点》で“見物”することを装うなり、さらには《裏側》とされる世界にも《またがった存在》の流儀を、“回り舞台”で随時反転される場面を眺めているかのように説くなり、工夫が凝らされてきた。

また、“開演される舞台”の《主題》、《タイミング》、語られる言葉・動作などの《表現》などをめぐっては、《当局にとって不適切な部分》をみずから選び出し、事前に《捨象》処理した、ある意味で《類比》や《ほのめかし》を企図した《高度に偽装した内容》であることへの留意が求められていた。いずれのスタンスでも、際立ったとされる《顔》は、その見定められたひとつの個のあり方をもって“敵手”から揶揄・酷評され得る。

さらに、“ストーリー展開”ということになると、取り込まれた《誤訳》によって《誤った……理解》が広がるなか、それを“本来”とされるはずの状態よりも「正しい」とした社会・経済を此处ぞと“場面選択”するなり、何らかの論理的とされる既知の《関係を逆転させ》、その場に作用し得る力学、登場人物のスタンスなどを類推するなり、“あべこべ”の思考が意表をつくありようを現し出すことがある。

■人や社会・経済が歩むとされる経路

中国の社会・経済のありようについては、“発展段階”という視角から、さまざまな読み解きがなされてきたが、定説はもとより、異説として唱えられた《回帰論》—ある観点から“進歩”とされていた状態から、“もと”とされる状態にもどるとの見立て—も、それをもはや旧説と退

け《体制間の融合》や先進的な《科学技術》にもとづく《二種の管理社会》の《止揚》を今後の課題とする一説も、いずれもコペンハーゲン解釈的な説示・啓蒙と見て取れる。慧眼の“観察者”は、これぞという注視すべきいくつかの状態のみを巧みに選び出し、それらの排列に工夫を凝らし、自説を展開する。“高い”とされる段階へ移行行く言説に“固執する”なり、見切りをつけて“棄却する”なり、“否定をする”がまったく捨て去るのではなく、ある局面を“高い段階”のうちに“保存する”として“転じる”なり、ついには未到の状態を《探し求める》なり、せんずるに、“観察者”にとって人々が“目を開くべき”とする状態は力強く説き示されるが、一方では、“瑣末なこと”、“道理に合わないこと”などの他のありよう・歩み方は、いわば視界の外へと片づけられている。

また、体制側が推し進める施策の語りであっても、コペンハーゲン解釈的な説き明かしと相通ずるところがある。不都合とみる状態の現前を《回避しながら》、好都合な状態を演出し得る《回路》を開き、“本来の形態”とする運動《路線》上に《大衆》を《参加させ》《注目させる》なり、筋立ての通りに《ロックイン》という状態へ引き寄せ、《運命共同体》なる状態へとすべ括るなり、“観察者”が目あてとしてみる状態・ルートへの「収縮」を仕掛け、その他は葬り去れるかのような見方が展開される。もっとも、対抗策として掲げられている別の《価値》・進め方の選び取りが《可能であることを示す必要がある》との明察も、思考様式としては軌を一にするようにみえる。

なお、何らかの視角から“在来の仕分け”では整理がつかないとする状態を慎重に見出し、《曖昧》なる語でひとまず括る“観察者”は、ある状態を“言い当てる”ような呼称・考察とは《一面的》で、《本当》のありようを《見誤る》という。そして、そうした《曖昧さ》を《望ましい方向

へと改善》するなり、それを《変わらぬ特性》ととらえた上で、極端な状態にいたらぬように《バランス》・《中道》を探るなり、切り開くべきとする《進路》を手解きする。ことに、《曖昧》とされる《制度》や《体制》のありようは、“際立った局面”に限られるが複数の状態が量子的な重ね合わせにあるかのように描出されているとも見て取れる。《過渡期》という何かへの移行という見方ではなく、いくつかの特徴的な状態が起り得る可能性の度合い自体に着眼した言説にいたっては、コペンハーゲン解釈的な「確率」描写を思い起こさせる。

■「ゼロ」,「一」,「二」,「多」という「数学的形象」を手立てに、戦術的に描き出される状態

体制側が何ら差し支えなく進展させられるとするプロジェクトの場合、《ゼロからつくっていく》という思考形式の記述がなされることがある。その空間・場は、“何も書かれていない書板”のごとく一重なり合う状態がすべて消去された上で一、もっぱら手にしたい状態のみを実際にかねえ、観察時には計画通りの一状態にだけ「収縮」することが予見されているような具合である。

また、何らかの目指すべき状態を他のものに先に提示・展開され、それと張り合う必要性があるとする場合には、“代わりになるべき”もうひとつの状態が目標に掲げられることがある。ときに《デジタル》などの斬新さを醸し出す修飾語も付して語られる《社会主義》社会像や、ひとつの《運命共同体》は、そのような類例であろう。それぞれの要語自体における差異を、「公共圏」において問うようなことは見受けられない。さらには《民主》のように、概念自体をまったく回避するわけにはいかない際には、それなりに利点も見込めるような二局面に《分割》の上、それらの便宜的な《使い分け》がなされていく。

他方、体制側を観察する者のなかには、《二重》性なるキーワードへの自在な当てはめが見られる。着眼したふたつの状態のみを重ね合わせ、カモフラージュされるアイデンティティや“思いもよらない”社会・経済の仕組みや歩みがさらりと説き明かされていく。

さらに、多様なありようでは、《ドゥルーズ的な“生成変化”》と『莊子』の《物化》との対比において、《方法的であり、倫理的》と《極度の受動性》がそれぞれの特性との読み解きがなされ、メカニズムの作動に付随するスタンスの違いが力説されていた。

これらは、いずれも観察時には「収縮」が生じ、論及なり例示された状態以外は捨て去られていくコペンハーゲン解釈的な思考をベースに、手際よく組み上げられている。

4. 多世界解釈に根ざした〈考えられる「量子都市ガバナンス」の記述〉

最後に、小論の要点を簡潔に取りまとめた上で、一連の本研究にて少しずつ練り上げてきた多世界解釈に根ざした〈考えられる「量子都市ガバナンス」の記述〉に、改めて加筆をしたい。

■社会・経済をいかに説き起こし得るのかを探りあてる作業にて

- ・現代用語から《こぼれ落ちる》状態につき、《死語》の《復活》による《ある種の現実・問題》の《可視/主題化》、あるべき《別物》の提起が、コペンハーゲン解釈的な思考でなされる。
- ・《問題設定》自体を《問い》、《新たな/異なる枠組み》からの観察では、体制・制度や論理の《相対化・間接化》、《感情》や《偶発性》への着眼で、代替状態への「収縮」が試みられる。
- ・《交差性》を踏まえて《スナップショット》

し続けるアナキストには、ある状態の観察時に、他のあらかじめ問題としていた局面・対立関係を捨てずに持ち続けている視線がうかがえる。

- ・《オピニオン》を《差異を取り逃がす表象の思考》とする見方にも、何かに括られる—その状態に「収縮」する一際に作動する《捨象》というメカニズムへの強い危機意識が示されているように。

■課題解決にむけて、しかるべき(裏腹に不
適当な)担い手として見出される人や都市

- ・“より良い社会・経済”にむけて“歯車”となり得る人々は、《参加》《協働》でも《闘争》でも、その都度、コペンハーゲン解釈的な「収縮」のごとく何らかの役割の担い手として見出される。
- ・その整えるべき個のありようには、持ち合うべき視線、つながり、果たすべき《使命》が絡み合う。《潜在性を含んだ》との思索も、結局は関心が寄せられるべき状態への「収縮」となる。
- ・《まだらに適用》《政治を消し去る》など、好都合な状態の「選出」と他の「棄却」もコペンハーゲン解釈的な描写である。複数の状態を重ねた際、それらを《隔てる境界は曖昧》とされる。
- ・コペンハーゲン解釈のもと、“擬装”により複数の状態を《同時に維持》し、特定の《好まない》状態を《取るに足らないものとして無視》する《レトリック》などが駆使されることもある。
- ・“不都合”な状態の提起があっても、それが《まれにしか出現しない》なら大目に見られ、むしろ特定の“エージェント”への^{ステルス}“内密「収縮」”という“アクター操作”がなされることがある。
- ・こうしたコペンハーゲン解釈的な見方や手法は、《モビリティ》/《スマート》/《デジタル》という修飾語付きで提示される都市/社会の

アイデンティティやはたらきにも適用され得る。

- ・一状態への「収縮」がいかなるからくり、操作のもとになされたかを探り続けることは、多世界解釈的にあり得る無数の重ね合わせ、もつれ合い状態を考える際の取りかかりとなる。

■「共存している状態の全体」のありようを、さらに考え進めるにあたり

- ・コペンハーゲン解釈的な方便に依拠するも、“いつも”とは違う「型にはまらない」状態への視線は、量子力学的な思考にあって「共存している状態の全体」に見当をつける上で示唆に富む。
- ・対象を上手くとらえるため、いわば“舞台”を大幅に拡張するなり、《門外漢》の“見物”を装うなり、“回り舞台”で随時反転される場面を眺めかのように説くなり、一工夫されることがある。
- ・“観察者”の意図にそって、特定の状態が事前に《捨象》/不問とされ、《類比》や《ほのめかし》を企図した《高度に偽装した》状態の描写/《目下の「問題」》のみの指摘もなされ得る。
- ・《誤った》とされる状態が「正しい」として“場面選択”されるなり、既知の論理的とされる《関係を逆転させ》類推するなり、“あべこべ”の思考が意表をつく状態を現し出すことがある。
- ・“これこそ拾い上げよ”と提起される“際立った状態”を汲み上げ続け、調整をおこたらないための仕組みは有用だが、その都度の括りは《差異を取り逃がす》見解であることにも留意する。

■人や社会・経済が進むとされる経路

- ・発展段階説は、“通説”も“新/異説”も、これこそ目の付け所と“観察者”が「収縮」させた単線的な経路・段階をベースにした論述であ

り、コペンハーゲン解釈的な説示・啓蒙と見て取れる。

- ・体制側の施策も、別の《価値》・進め方の選り取りを提示する対抗策も、“観察者”が目あてとしてみる状態・ルートへの「収縮」が仕掛けられ、その他は葬り去れるかのような見方である。
- ・多世界解釈的には、特定の制度・体制や技術、それらに《作りつけの価値》に鑑みた絵解きにとどまらず、考え得る無数の理路/路線/経路をすべて同時に進む「量子ウォーク」を推考する。
- ・《別の道》に導かれる場合も、取り得る《回路》を同時に歩むさまでとらえ直す。《不可避性を否定する》視角や《完全なものなんて何もない》との見方にて、他の状態を“汲み出し”続ける。
- ・《曖昧》とされるありようは複数の“際立った”状態が量子的な重ね合わせにあるかのようで、起こり得る度合いに着眼した言説は、コペンハーゲン解釈的な「確率」描写を思い起こさせる。
- 「ゼロ」, 「一」, 「二」, 「多」という「数学的形象」を手立てに描出される状態
- ・《ゼロから》という思考形式では、空間・場は、重なり合う状態をすべて消去され、手にしたい状態のみがかない、観察時には計画通りの一状態にだけ「収縮」することが予見されている。
- ・“目指すべき”一状態に対して“代わり”となるもうひとつの状態を掲げたり、概念自体を回避できないなら利点を見込める二局面に都合よく《分割》・《使い分け》がなされることがある。
- ・複雑系などの《全体論》なる研究法も、政策的意図などを踏まえ、それらしくある状態を《全体》として論じるが、「同時に共存している無数の状態」=“全体”を汲み尽くすもので

はない。

- ・コペンハーゲン解釈的な思考での「収縮」に関しては、《方法的であり、倫理的》や《極度の受動性》のように、そのメカニズム自体の作動に付随するスタンスが観察されることがある。
- ・“観察者”が、コペンハーゲン解釈的な考えにならない、人為的に捨て去り、なきものと始末する状態は、論及しない状態をも含め、共存している状態の全体から消滅しているわけではない。

なお、これまでに整理してきた見方についての換言を含め、次のような要点も掲げられよう。

- ・《〈一〉を割る》にしても、量子的な重ね合わせ、もつれ合いを考えるなら、“割り方”は提起されたものに限らない。事前に除外された仕方を含め、他にも数多の割りようがあり得る。
- ・説明責任や透明性を重んじ、民主的な手立てで語られる課題と解決法においても、コペンハーゲン解釈的な「収縮」によると見受けられるならば、その他のありようへの思索を止めない。
- ・そうした「収縮」による絵解き戦は、いずれも一状態の提示にすぎない。“量子コヒーレント状態”のままで考え進め、論じ合うには、“基本的人権”などの共存度(共存の程度)も関わろう。

試論として少しずつ練ってきた多世界解釈に根ざした〈考えられる「量子都市ガバナンス」の記述〉については、上述の肝所を踏まえ、これまでのところの最新版「多居場所(個がくらす地点)/多アイデンティティ(個のあり方)/多連係(人や組織のつながり方[“共鳴”構造])/多経路(人や組織の歩み方[量子ウォーク])解釈」(谷村 2020, 21-22)に、ひとまず補筆を施して

おきたい。

多居場所/多アイデンティティ/多連係/多経路/多路線/多経路解釈

■古典論的な実在をこえた「実在」をもとに

この「多居場所(個がくらす地点)/多アイデンティティ(人や組織/都市/社会の個のあり方)/多連係(人や組織/都市/社会のつながり方[“共鳴”構造])/多経路/多路線/多経路(人や組織/都市/社会の歩み方[量子ウォーク])解釈」においては、量子力学的に共存している複数の状態の“全体”を、多世界解釈が説き明かすような—古典論的な実在をこえた—「実在」と考える。なお、見出しの“/”は“and/or”(および/または)の意で用いている。何かの観察がなされた際に、“観察者”が論じるであろうありようを例示しているが、コペンハーゲン解釈流に着眼点だけを掲げておきたいのではなく、これらにとどまらず、知り得ていないがいくつものあり得る多〇〇/多□□/多△△解釈...とも量子的な重ね合わせ、もつれ合いにあるとみる。

■“対象”なるもの、そして、その“全体”には“社会科学”とされる分野において、その“対象”は、物理学でよく図解される電子の観測のごとく普遍的に「それ」と論及できるあり方ではなく、“それ”なるものが、すでに量子力学的にさまざまな自己・他者や、もの・こととも重ね合わせ、もつれ合い状態にあるとみておかなければならない。“対象”の設定とは、そのこと自体、コペンハーゲン解釈的に収縮させた一状態化であることに留意したい。また、そうした“対象”は、同時に、観察の“主体”ということもあり得る。

この“対象”なるものの“全体”には、“現代用語”ではとらえがたく“死語・廃語”にもあたって探究される状態や、事前に覆い隠すなり、切り捨てるなり、あることを問われないようにす

るための“擬装・偽装”/もっともらしい“問題”提起、事実にもとづかず都合よく仕立て上げられた“つくりごと(捏造・虚構)”が含まれることがある。

■どの状態が選ばれるかは共存度によるが

そうした“対象”なるものについて、調査時に、どの状態の“観察者”になるかは、各状態の共存の程度に関係することになる。ただ、政策的/制度的/批評的な観点などから、“観察者”が此处ぞと操作的に“収縮”させた“しかるべき状態”ばかりの論及にふれていると、それですべてが汲み尽くされ/語られたかのように思い込まされ、他のあり得る状態が「実在」しながらも、“不可視化”されることがある。

■特定の“アクター”として仕立てられるなかで

“より良い社会・経済”などにむけて、人々は、その都度、コペンハーゲン解釈的な「収縮」のごとく何らかの役割の担い手として見出され、促される。その整えるべき個のありようには、持ち合うべき視線、つながり、果たすべき務めが絡み合う。ときに、“当人”が気づくこともなく、何らかの“エージェント”への“内密^{ステルス}「収縮」”という操作がなされていることもある。説明責任や透明性を重んじ、民主的な手立てで語られる課題と解決法においても、コペンハーゲン解釈的な「収縮」によると見受けられるならば、論じ合い、選び取られたとされる状態についてのみならず、その他のありようへの思索を止めない。この多世界解釈的な思惟では、「現実」の“全体”像を見渡してみれば、着目/協議/熟議された状態のみならず、可能な状態のすべてが「実際に存在している」とみる。

■〈一〉を方便として“割る”にしても

ときに、“目指すべき”とされる一状態が“みずから”に不都合な“観察者”は、“代わり”となるもうひとつの状態を掲げたり、概念自体を回避できないなら利点を見込める二局面に都合よ

く割り、それらを工夫して使い分けることがある。そうした思考法にそって、かりに多世界なる〈一〉を方便として“割る”にしても、“割り方”は提起されたものに限らず、他にも数多の割りようがあり得る。もっともらしい枠組み/施策や代案/対抗策を見せつけられても、多世界解釈的に読み解くと、コペンハーゲン解釈流に何かを際立たせるにも別様があり得ることを思い起こせよう。

■“私自身”を観察する場合にあっても

“当人”が“みずから”を観察する場合にも、「周囲との相互作用」によって、“しかるべき”あり方を含め、ある状態が一段と意識されるかもしれない—“ことのほか”、あるいは、“それなり”といった具合に一。いずれにしても、それぞれの“観察者”は、自分が唯一の存在だと思っているので、その個人に可能なさまざまな状態のなかからその結果が見えたのは往々にして偶然のように思ってしまう。その時々を感じ取ってきた“主たる”(収縮)状態を、いわば“どっちつかず”に—いずれとも定まらずに—生き、また“無意味なもの”については切り離し、あたかも見ないでいられるかのように考えてしまう。もっとも、この多世界解釈的な思惟では、「状態の収縮」は一切考えず、明示・論及されない他の状態も相変わらず共存しているとみる。

■スタンスとして語られる一状態

ある状態が、“実体”としてのみならず、“相応しい”—“観察者”の立場によっては“ノイズ”や“屑”同然—とされる倫理・価値観や世界観に根ざした“スタンス”としての意で主張されても、その他の状態も絶えず共存していると思考する。

コペンハーゲン解釈的な思考での「収縮」というメカニズム自体の作動に付随するスタンスが観察されることもあるが、しからば同じく見出された特定のあり方のみならず、その他のありようとの量子的な重ね合わせ状態を推考する

こともできよう。

なお、“これこそ拾い上げよ”と提起される“際立った状態”を汲み上げ続け、調整をおこなわないための仕組みは有用だが、その都度の括りは「収縮」という“無用な原理”に根ざしたコペンハーゲン解釈的な見解とならざるを得ないことに十分留意する。ひとつには、多世界解釈的な思考から改めてとらえ直す作業が欠かせない。

■変化や多元とされる状態の説き示しについて

たとえ巧みに取捨選択・再選択され、排列ないし配置された諸状態をもとに、“パラダイム転換”、“転回”、“変^{メタモルフォーゼ}態”、“発展段階説”、“多元描写”、“交差性”などが展開・再編されたとしても、そこに提起されていない無数の状態・歩み方との共存を同様に深慮する。

そうした「収縮」による絵解き戦は、いずれも一状態の提示にすぎないが、いかなるからくり、操作のもとになされたかを探り続けることは、多世界解釈的にあり得る無数の重ね合わせ、もつれ合い状態を汲み出す際の取りかかりとなろう。

なお、“量子コヒーレント状態”のまま考え進め、論じ合うには、“基本的人権”などの共存の程度も関わろう。

多世界解釈に根ざしたこの「量子都市ガバナンス」研究は、小論をもって、「量子」「都市」「ガバナンス」の各語について進めてきた一連の探究におおよその目処がつき、荒削りな作業ながらも、量子的な個のあり方/つながり方/歩み方などのなかで“分かち合い”、“話し合い”得るひとつの“たたき台”をこしらえられた。むろん、この素案は、無数の汲み出し得る状態のうちの一状態にすぎない。今後、みずからは、本研究の一事例研究として、「宗教」と「量子都市ガバナンス」、ことに「チベット密教」などに関連した先学の高論を学ばせていただきなが

ら、この試論をさらに練ってみたい。

■注

- (1) 多世界解釈から類推される試論「量子都市ガバナンス」の記述として、「多居場所/多アイデンティティ/多連係/多経路解釈」[ver. 2020]については、補筆部分をイタリックにて明示するかたちで、次のように記してみた(谷村 2020, 21-22)。

この「多居場所(個がくらす地点)/多アイデンティティ(個のあり方)/多連係(人や組織のつながり方[“共鳴”構造])/多経路(人や組織の歩み方[量子ウォーク])解釈」においては、量子力学的に共存している複数の状態の“全体”を、多世界解釈が説き明かすような—古典論的な実在をこえた—「実在」と考える。

なお、“社会科学”とされる分野において、その“対象”は、物理学でよく図解される電子の観測のごとく普遍的に「それ」と論及できるありようではなく、“それ”なるものが、すでに量子力学的にさまざまな自己・他者や、もの・こととも重なり合いもつれ合う状態にあるとみておかなければならない。“対象”の設定とは、そのこと自体、コペンハーゲン解釈的に収縮させた一状態化であることに留意したい。また、そうした“対象”は、同時に、観察の“主体”でもあり得ることも、心に留めておきたい。さらに、この“対象”なるものの“全体”には、事実にもとづかず都合良く仕立て上げられた“つくりごと”が含まれていることがある。

その上で、調査時に、その“対象”なるものについて、どの状態の観察者になるかは、各状態の共存の程度に関係することになる。ただ、観察者が政策的/制度的/批評的な観点などから、此処ぞと操作的に“収縮”させた“しかるべき状態”ばかりへの論及にふれていると、それですべてが語られたかのように思い込まされ、他のあり得る状態が“不可視化”されることがある。“当人”がみずからを観察する場合にも、「周囲との相互作用」によって、そのように提起したあり方を含め、ある状態が一段と意識されるかもしれない—“ことのほか”、あるいは、“それなり”といった具合に—。もっとも、この多世界解釈的な思考では、「状態の

収縮」は一切考えず、他の状態も相変わらず共存しているとみる。

いずれにしても、それぞれの観察者は、自分が唯一の存在だと思っているので、その個人に可能なさまざまな状態のなかからその結果が見えたのは単なる偶然だと思ってしまう。その時々を感じ取った(収縮)状態を、「どっちつかずに生き」、また“無意味なもの”については切り離し、あたかも見ないでいられるかのよう¹に考えてしまう。しかし、この多世界解釈的な思索では、「現実」の“全体”像を見渡してみれば、可能な状態のすべてが実際に生じているとみる。

なお、ある状態が、“実体”としてのみならず、“相応しい”—観察者の立場によっては“ノイズ”や“屑”同然—とされる倫理・価値観や世界観に根ざした“スタンス”としての意で主張されても、その他の状態も絶えず共存している²と思考する。

また、たとえ巧みに取捨選択・再選択された諸状態をもとに、“パラダイム転換”、“転回”、“^{メタモルフォーゼ}変態”、“多元描写”などが展開されたとしても、そこに提起されていない無数の状態との共存を同様に深慮する。

- (2) J. ドライゼクの「言説代表」論を例示する田村哲樹(2018)は、彼がそうした提案にいたる理由のひとつに、「通常の代表制において想定されている“個人”観への疑問」点を指摘していることにふれ、次のようにその要点を整理してみせる(74)。

「個人」は、単一の意見・観点を持っているのではなく、「多層的な自己(multiple self)」として捉え返される。個人とは、複数の言説が交錯する場なのである。そうだとすれば、「個人」ではなく「言説」を単位として代表を考えた方が、各自の「多層性」をより踏まえた代表制になると考えられる。

そして、このことは「民主主義一般に当てはまることである」(74)と添えている。

- (3) 政策研究にて「ガバナンス」とは、広義には「公共的な問題の解決のパターン」をさし、「これまで、市場か政府かという二者択一で議論されてきたが、それ以外の問題解決パターンの重要性が認識されたときに、ガバナンスという言葉が使用される」

との解説がなされている(風間 2011, 119)。また、「政策ネットワーク」に関しては、さしあたりとして、「ある政策領域において、アクターが官民の枠を越えて自主的に資源を持ち寄り、問題を解決していく関係性」との概念規定がなされている(風間 2011, 129)。

- (4) 「民衆資本主義」には、「誰もが資本所得と労働所得をほぼ等しい割合で得ている。それでも人々の所得には差がある。……直接の再分配は限られるが、無償の医療と教育が世代間の所得移動性を促す」(傍点原著者)との説明が付されている(ミラノヴィッチ 2021, 256)。
- (5) たとえば、「感情分析」にあつては、「人間の目や耳で観測するにはあまりにも微細か瞬間的」な「測定」が、「当人も気づいていない行動」を「検出」し、「集約」「処理」され、「予測」に活かされているが、すでに「感情の観察だけでなく、感情の修正に拡大」という動向も見受けられるという(ズボフ 2021, 323-324, 331-332)。
- (6) S. ズボフ(2021)は、この“ソーシャル物理学”とは、フランス実証派哲学者で数学者でもあるコントが開いた「社会物理学」—自然科学をモデルとした社会学—の流れを汲むことを、原注にて補説している(126 n. 5)。
- “ソーシャル物理学”では、「階級」「人種」「性別」などは「古い」社会的カテゴリで「時代遅れ」とされ、好都合な取り上げ方に、「行動パターン」によってコード化された「階層」が例示されている(489, 496)。
- (7) 重田園江(2020)は、「統治性研究」とは、「西洋近代において、いかなるしかたで個人の生(生活・生命)が全体秩序に関わる問題となり、政治的な介入の対象となってきたかを、統治という観点を導入することで歴史的に描き出そうとした研究である」(275-276)と解説する。さらに「統治とは、近代における全体秩序の形成に関わる問題を、人と人との関係のあり方、人の行為を特定の方向に導く方法・型の観点から考察するための概念枠組みである」(276)と付言している。
- (8) 訳出にあたった米山裕子は、「訳者あとがき」(キンナ 2020, 374)にて、アナキズムとは「国家や資本主義など、世の中のあらゆる支配を排し、一人一人が自らの意志で互いに助け合うことによって、自由

- で平等な社会を築こうという思想」と簡潔に説き示す。そして、アナキーには、“無政府状態”，“無秩序”という定訳に加え，“無支配状態”の訳も与えるべき」と見て取り，文脈に合わせ訳語を整えたとも記している。
- (9) 大久保歩(2018)は、「ドゥルーズにあっては他の思想家とのアレンジメント自体が彼の思想を形成している」ことを説き示し，“ドゥルーズ”とはそうしたアレンジメントの総体を指す名だと理解された」と記している(152 n. 2)。
- (10) 堀千晶(2022)は、1955年に上梓されたメルロ＝ポンティ『弁証法の冒険』に論及するドゥルーズをとらえる(346)。「プロレタリアートのありよう」について、メルロ＝ポンティ自身は、「情況とのかかわりの揺らぎのなかで、まだ存在していない/もはや存在していないものとして、たえざる自己止揚、自己変容の過程のなかでとらえる」とすることが、同書から手短かに引かれている(347)。
- (11) 松本潤一郎(2016)は、「私にとって政治とは、対話の成立条件そのものを当の対話の中で複数の者が言葉を介して探ってゆく過程である」(512-513)とした上で、「その一側面が私にとってリアルなものとして切迫している」(513)と述べている。
- (12) 魏後凱他(2021)は、「中国の特色ある新しい都市化への道」とは、「科学的発展観」をベースに、「人口が多く土地が少なく、資源が相対的に不足している」という基本的国情に立脚して、多元的、漸進的、集約的[な]、都市と農村の融合した、新しい都市化への道を歩み、次第に資源を節約し、環境にやさしく、経済的かつ高効率で、社会が調和的で健全に発展する都市化の新たなパターンを形成させることである」(36)と要約している。
- (13) この「地元農民」には、郊外において、「ここ数年来、……“農業”から“非農業”に転換した非農業戸籍者」が含まれる(魏他 2021, 17)。
- (14) CASEとは、「Connected(つながる), Autonomous(自動運転), Shared&Service(共有), Electric(電動化)の頭文字をつなげた言葉」で、「今や自動車産業を語る際に欠かせないトピックス」と、まえがきには補説が添えられている(湯 2021, 3)。
- (15) 江口伸吾(2021)は、序章において、「社会管理は、政府が主体となって、一方向的な上意下達のプロセスを通して、社会公共事務を管理する特徴があるのに対して、社会ガバナンスは、国家ガバナンスに対応するように、政府と社会が主体となって、多方向的な話し合いと協力を通じて、公民による社会公共事務の自己管理と自治を進めること」と記している(16-17)。
- (16) 中国での近年の「民主制度建設」をめぐる、江口伸吾(2021)は、「従来から限定的に実施してきた選挙によって代表者を選出する“選挙民主(electoral democracy)”に加えて、協議、対話を通じて利害調整と社会秩序を築く“協商民主”[deliberative democracy]の試みが重視されるようになり、二つの民主の相互関連性が中国型の民主制度を築くと捉えられるようになった」(213-214)と説く。
- (17) 持永大(2022)は、具体的には、S. ストレンジの概念—「直接相手に影響力を行使する関係のパワー」—ならびに「政治経済構造をつくり決定する構造的パワー」—(11)などを糸口に、物的なインフラの整備で高まる「地政学的な連結性」や、そうした力学を「補完」という「デジタルプラットフォーム、データ保護やサイバー空間における規範などの世界的なルールづくり」(12)を概説している。
- (18) 資本主義のひとつの「類型」として「中国型資本主義」を提示する加藤弘之(2016)は、その「経済システム」を、「改革開放以降、伝統経済から市場経済への移行と、社会主義から資本主義への移行という“二重の移行”を進め、しだいにその姿を明らかにしてきた」(3)ものととらえている。
- (19) 加藤弘之(2016)は、「曖昧な制度」の簡潔な定義を記した上で、それを次のように図説している(12)。
- 形成途上にある制度の多くは、二層(二重円)構造からなる。コア部分は制度が認知され、定着した領域をさし、周辺部分は制度が進化する過程で一時的に生み出される過渡的な領域をさす。「曖昧な制度」は、二重構造からなる複数の制度の重複が作り出していることが多く、その場合、周辺部分の重複が意味する「曖昧さ」は制度の進化とともに消滅するかもしれないが、コア部分における重複が意味する「曖昧さ」は、中国の経済システムの特質として形を変えながら繰り返し再生産されていく。
- (20) 「中国の秘密結社が、現体制を破壊して天下を取るための基本公式」を、安田峰俊(2021)は、次のように提示している(315)。

活動内容やメンバーを秘匿した秘密結社的な集団が、舶来のイデオロギーを用いて理論武装し、中国に介入する意思を持つ海外勢力の支援を受けて、ひそかに庶民の人心を収攬しゅうらんしていく。こうした組織が大衆を動員して武装蜂起し、国家を分裂させて群雄割拠ぐんゆうかくきょのなかで台頭すれば、政権がひっくり返る。

そして、「政権を握る既得権益者」(315)たる執政党としては、こうした手はずを整え得る組織を「危険分子」と断じ、未然に「摘み取る必要がある」(316)と思考する筋立てを説き明かしている。

- (21) J. フリードマン(2008)は、「こうした課題については、丁学良(X. L. Ding 1994)が名高い」として、次のように述べている(219)。

彼は、それを「二重性制度」と称している。「制度の二重性」という概念は、個々の機構の性質や機能ならびにそれらの境目の不確定性を際立たせている。また、それは、政治的な過渡期にはたらく種々の力学が織り成す関係や相互の浸透を浮き彫りにしている」(299)。丁学良は、さらに、現代中国のみならず、より広く東アジア諸国の特性を示すため、みずからの議論を拡大している。「東アジアでは、国家は、明確な限界もなく、組織的に拡散している。その権力ならびに機能は広範に及び、然るべき手続きといったものにはほとんど関心を払わない。それゆえ、公と私、政治と個人、公式と非公式、公務と非公務、政府と市場、法と慣例、手順と実質との区別が、ことごとくあいまいにされている」(317)。

Ding, X. L. 1994. "Institutional Amphibiousness and the Transition from Communism: The Case of China." *British Journal of Political Science* 24, no. 1: 293-318.

- (22) 毛沢東は「大衆路線」を掲げたが、中兼和津次(2021)は、「中国において大衆とは最終的な意思決定権を持たない、エリート(党員や指導者)によって指導【領導】される対象、悪くいえば道具でしかない」(33-34)と見て取る。そして「毛沢東の階級論」をめぐるのは、区分けした「階級と革命に対する態度が一对一で対応している」と「仮定」(73)されており、形勢に応じて「さまざまな選択肢」につき、敵味方の「力量」を「計算できることになる」モデ

ル(75)をいかようにも仕立て得ると具体的に示してみせる。

なお、『東南中国における伝統のポリティクス』を探究する川口幸大(2013)は、「階級という固定的なラベリング」に関して、「仮に一時的なものであったにせよ、革命時の経済状況のみが後の社会的な属性を大きく規定する」(184)諸事例を珠江デルタの村落で聞き取り、「共産党は富と貧を一時的な視点から数値化して明白のものとし、そこに政治的、道徳的な意味を結びつけていった。制限を加えた可視的な場において濾過された対象を出現させ、比較し、名を与え、分析すること[フーコー 1974: 151-156]が行われたわけである」(185)と説き明かす。

フーコー、ミシェル(渡辺一民・佐々木明訳)1974、『言葉と物』、東京、新潮社。

- (23) 中兼和津次(2021)は、まずは「典型的な誤訳」に「共産主義」と訳された「 Kommunismus (communism) 」(68)をあげ、次のように解説を加えている(69)。

ただ資産を共有にしさえすれば共産主義になるといった間違った通念が生まれ、広まっていった。同様に、ブルジョア (bourgeois) を「資産者」と訳したために、中国では資産を持つ者、つまり金持ち、豊かな者がマルクスたちの言うブルジョアだと理解されてしまった。

さらに、このパラグラフに添えられた「注」においては、次のような補説がなされている(384)。

bourgeois の元来の意味は、城壁で囲まれた町(ドイツ語でいう Burg)に住む商工業者を指している。したがって、ブルジョア革命のことを「市民革命」ともいう。もし堺利彦や幸徳秋水がブルジョアを市民と訳していたら、共産党員をはじめ中国の左翼の人々が「市民階級打倒」と叫んだだろうか？ 市民と有産者の意味上の、また語感の上の差は大きい。

- (24) 中島隆博(2011)は、『莊子』齊物論「胡蝶の夢」を論じるにあたり、次の訳文を掲げている(176)。

かつて莊周が夢を見て蝶となった。ヒラヒラと飛び、蝶であった。自ら楽しんで、心ゆくものであった。莊周であるとはわからなかった。突然目覚めると、ハッとして莊周であった。莊周が夢を見て蝶となったのか、蝶が夢を見て莊周となったのか、わからぬ。莊周と蝶とは必ず区別があるはずである。だから、これを物化と言

うのである。(傍点原著者)

■参考文献

- 程雅琴・谷村光浩 2013, 「徽州商人のくらしが考究される視座, そして“考えられるガバナンス”の記述」, 『名城論叢』, Vol. 13 No. 4, pp. 93-113, 名古屋, 名城大学経済・経営学会.
- 江口伸吾 2021, 『現代中国の社会ガバナンス』, 東京, 国際書院.
- 江間有沙・藤井啓祐 2020, 「量子をめぐるエコシステム」, 『現代思想』, Vol. 48 No. 2, pp. 8-20, 東京, 青土社.
- フリードマン, ジョン(谷村光浩訳)2008, 『中国 都市への変貌』, 東京, 鹿島出版会.
- 藤谷武史 2016, 「ガバナンス(論)における正統性問題」, 東京大学社会科学研究所 大沢真理・佐藤岩夫編『ガバナンスを問い直す I』, pp. 217-245, 東京, 東京大学出版会.
- グリーン, ベン(中村健太郎・酒井康史訳)2022, 『スマート・イナフ・シティ』, 京都, 人文書院.
- 堀千晶 2022, 「ドゥルーズ/マルクス」, 鹿野祐嗣編『ドゥルーズと革命の思想』, pp. 323-418, 東京, 以文社.
- 加藤弘之 2016, 『中国経済学入門』, 名古屋, 名古屋大学出版会.
- 川口幸大 2013, 『東南中国における伝統のポリテイクス』, 東京, 風響社.
- 風間規男 2011, 「公的ガバナンスと政策ネットワーク」, 新川達郎編『公的ガバナンスの動態研究』, pp. 113-148, 京都, ミネルヴァ書房.
- キンナ, ルース(米山裕子訳)2020, 『アナキズムの歴史』, 東京, 河出書房新社.
- Kitchin, Rob 2019, “Reframing, Reimagining and Remaking Smart Cities,” in Claudio Coletta et al. eds., *Creating Smart Cities*, pp. 219-230, New York, Routledge.
- 町田茂 1994, 『量子力学の反乱』, 東京, 学習研究社.
- 松本潤一郎 2016, 「矛盾は失効したのか」, 市田良彦・王子賢太編『現代思想と政治』, pp. 512-540, 東京, 平凡社.
- ミラノヴィッチ, ブランコ(西川美樹訳)2021, 『資本主義だけ残った』, 東京, みすず書房.
- 持永大 2022, 『デジタルシルクロード』, 東京, 日本経済新聞出版.
- 中兼和津次 2021, 『毛沢東論』, 名古屋, 名古屋大学出版会.
- 中島隆博 2011, 『共生のプラクシス』, 東京, 東京大学出版会.
- 大久保歩 2018, 「友愛の政治と来るべき民衆」, 松本卓也・山本圭編『〈つながり〉の現代思想』, pp. 125-157, 東京, 明石書店.
- 重田園江 2020, 『フーコーの風向き』, 東京, 青土社.
- 大沢真理 2016, 「ガバナンスを問い直す」, 東京大学社会科学研究所 大沢真理・佐藤岩夫編『ガバナンスを問い直す I』, pp. 1-17, 東京, 東京大学出版会.
- ローゼンブラット, アレックス(飯嶋貴子訳)2019, 『ウーバーランド』, 東京, 青土社.
- 佐藤文隆 2005, “量子力学は何の理論か? ”, 『現代思想』, Vol. 33 No. 11, pp. 42-58, 東京, 青土社.
- 佐藤文隆 2007, “量子力学の身分”, 『現代思想』, Vol. 35 No. 16, pp. 54-67, 東京, 青土社.
- 佐藤嘉彦他 2022, “量子の世紀”, 『日経ビジネス』, No. 2146(2022.06.27), pp. 10-33, 東京, 日経BP.
- 田村哲樹 2018, 「グローバル・ガバナンスと民主主義」, グローバル・ガバナンス学会編『グローバル・ガバナンス学 I』, pp. 59-79, 京都, 法律文化社.
- 湯進 2021, 『中国のCASE 革命』, 東京, 日本経済新聞出版.
- Tanimura, Mitsuhiro 2005, “Development and Urban Futures,” *The Journal of Social Science*, No. 54, pp. 49-72, Tokyo, International Christian University.
- Tanimura, Mitsuhiro 2006, “Beyond UN-Habitat’s Classic Framework in Urban Development Strategies,” *The Journal of Social Science*, No. 57, pp. 275-304, Tokyo, International Christian University.
- 谷村光浩 2009, 「物理学からの類推より“考えられるガバナンス”の記述」, 『名城論叢』, Vol. 9 No. 4, pp. 51-66, 名古屋, 名城大学経済・経営学会.
- 谷村光浩 2012, 「移動する人々をめぐる論考からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」, 『名城論叢』, Vol. 12 No. 4, pp. 49-70, 名古屋

- 屋, 名城大学経済・経営学会.
- 谷村光浩 2018, 「多世界解釈からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」, 『名城論叢』, Vol. 18 No. 4, pp. 1-19, 名古屋, 名城大学経済・経営学会.
- 谷村光浩 2020, 「“都市”をめぐる論考の多世界解釈的な再読を通じて練る 考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」, 『名城論叢』, Vol. 21 No. 1・2, pp. 1-27, 名古屋, 名城大学経済・経営学会.
- 植村邦彦 2010, 『市民社会とは何か』, 東京, 平凡社.
- 宇野重規 2016, 「政治思想史におけるガバナンス」, 東京大学社会科学研究所 大沢真理・佐藤岩夫編『ガバナンスを問い直す I』, pp. 21-40, 東京, 東京大学出版会.
- 和田純夫 1998, 『シュレディンガーの猫がいったい』, 東京, 河出書房新社.
- 魏後凱(張志剛・李宇霞訳)2021, 「序文」, 魏後凱編『中国の特色ある新しい都市化への道』, pp. i-vi, 東京, 勁草書房.
- 魏後凱編(張志剛・李宇霞訳)2021, 『中国の特色ある新しい都市化への道』, 東京, 勁草書房.
- 魏後凱他(張志剛・李宇霞訳)2021, 「中国の特色ある新しい都市化への道筋」, 魏後凱編『中国の特色ある新しい都市化への道』, pp. 3-93, 東京, 勁草書房.
- 矢吹晋 2018, 『中国の夢』, 東京, 花伝社.
- 矢吹晋 2020, 『(中国の時代)の越え方』, 東京, 白水社.
- 山本圭 2018, 「ポスト・ネイションの政治的紐帯のために」, 松本卓也・山本圭編『〈つながり〉の現代思想』, pp. 77-99, 東京, 明石書店.
- 安田峰俊 2021, 『現代中国の秘密結社』, 東京, 中央公論新社.
- 張博樹(石井知章他訳)2019, 『新全体主義の思想史』, 東京, 白水社.
- ズボフ, ショシャナ(野中香方子訳)2021, 『監視資本主義』, 東京, 東洋経済新報社.

Innovating a Paradigm of “Quantum Urban Governance”
in Light of the Thought of the Many-Worlds Interpretation:
By Radically Rethinking Governance-Related Discourses

Mitsuhiro Tanimura

Abstract

By radically rethinking governance-related discourses, this paper proceeds further with fundamental research for innovating a paradigm of “Quantum Urban Governance” in light of the thought of the Many-Worlds Interpretation. Based on the above-mentioned deliberation, the last section attempts to raise the idea of the “Many-‘Habitats’/ Identities / Linkages / Processes / Lines / Routes Interpretation.”